NOSTRADAMUS

ノストラダムス秘密の大予言

＊1999年の謎＊

麻原彰晃

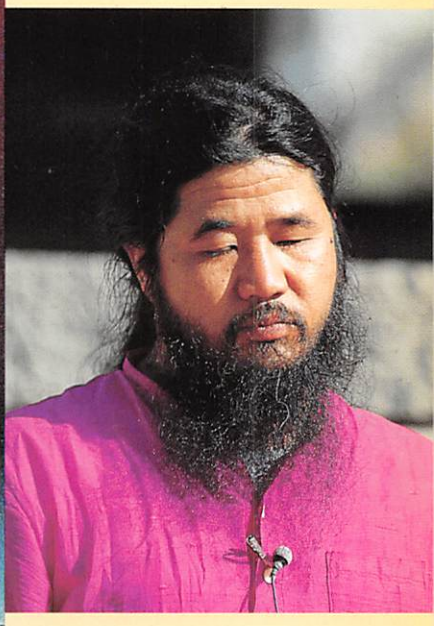
NOSTRADAMUS

ノストラダムス秘密の大予言

✧1999年の謎✧

麻原彰晃

出典：今「地球」を救う本（学研）



ノストラダムスは人類にどのような未来を示したのか？ 麻原尊師がついにその封印を解く！

はじめに

だれしもが感じざるを得ないのではないかと思う。今世紀末には何かしらとんでもないことが起こるかもしれないと。

ある日、異次元へと飛び未来を見てきたわたしは、大宇宙占星学によって詳しいデータを探るとともに、他の予言者の予言と照合することによって、より正確な未来をつかもうと試み始めた。

そして、まず『ヨハネの黙示録』を解読したとき、

「次はノストラダムスだ！」
という強い思いに駆られたのである。
このノストラダムスの予言詩集『諸世紀』の解読には慎重を極め、渡仏した上での資料収集からスタートした。
そして三年が過ぎた今、多くの資料を土台とした上で自らの神秘力を駆使し、問題の予言詩〝一九九九年……〟の謎に挑む。

一九九九年七の月
恐怖をまき散らす大王が天から降りてきて
アングーモワの大王を甦らせるだろう
その前後に軍神が幸せに統治するだろう

刻一刻と時間は近付いている。今こそノストラダムスがわたしたちに遺した衝撃の真実を明かそう――！

一九九一年十一月

麻原彰晃

目次
CONTENTS

ノストラダムス秘密の大予言

❖一九九九年の謎❖

はじめに

❖

第一章　本物の予言詩集を求めて　9

●次々と現象化する予言
●『ヨハネの黙示録』の次は「ノストラダムス」

●書き残したそのままの言葉を受け止めたい！
●封印を解くべき時は今
●ノストラダムスの故国、フランスへ
●モンペリエ時代のノストラダムス
●傑出した予知能力は〝ユダヤの秘儀〟の産物!?
●瞑想によって未来を見る
●古星術にも詳しかったノストラダムス
●〝中世〟という暗黒時代の中で
●もたらされた素晴らしい情報
●鮮やかに適中したフォンブリュヌ氏の解釈
●生前に出版された予言詩集が残っている!?

❖ 第二章　ノストラダムスの故国、フランスでの資料収集

●さい先の良いスタート
●真夜中の作戦会議
●解脱者の本領発揮
●次々と集められた最古の予言詩集
●〝ノストラダムスの遺言状〟も入手
●本場フランスの専門家、シュマラ氏との会談
●あらゆる預言の原典『ヨハネの黙示録』
●人類は滅亡するのか？
●『一九九九年七の月……』は偽物？
●オウム真理教だからできた本格的情報収集
●一九九九年は〝きっかけ〟の年
●気がかりな二つの予言詩

●戦慄の未来が浮かび上がる
●抜群の適中率――瞑想による近未来予言
●もう一人の予言者
●〝仏・ノストラダムス協会〟もバックアップ
●残された問題

❖ 第三章　ついに解かれた封印

●早速始まった資料の翻訳・検討作業
●慎重に進められる解釈
●最終解脱者のインスピレーションを頼りに
●予言詩でも明言――運命は変えられる！
●二〇三五年、キリスト教社会は崩壊する？

●〝太陽の社会〟とは？
●次々と翻訳される〝本物の予言詩〟
●近未来ほど具体的な表現に

❖ 第四章　一九九九年の謎

●明かされる『一九九九年七の月――』の秘密
●『アングーモワの大王』は『神の御使いモーセ』
●〝モーセ〟という人物
●ついに導き出された〝バドマサンバヴァ〟の名
●『ヨハネの黙示録』とも『マタイによる福音書』の予言とも一致
●〝狭い門から入った者〟は救われる！
●待ち受ける破局、そして……

第一章

本物の予言詩集を求めて

◉次々と現象化する予言

わずか三日間――。
わたしに許された時間は、たったこれだけなのだ。
この厳しい条件のもとで
ノストラダムスに関する
十分な情報収集は果たして可能なのか!?
一度は渡仏をあきらめかけたものの
意を決してフランスへと飛ぶ――
必ずやわたしは、予言の解読に必要な資料をすべて集めてみせよう!

三年前のこと――。わたし自らフランスでの情報収集の必要性に迫られたそもそもの発端は、ティローパ師（師とはオウム真理教において第二段階目に位置するクンダリニー・ヨーガを成就した者に贈られる称号。ティローパはホーリー・

ネーム〈宗教名〉である）がフランスから持ち帰った数冊の書物――。それは、フランスにおいて出版されたノストラダムスの予言詩集であった。

ミシェル・ド・ノストラダムス――彼は不思議な男だった。今なおその名は一種の畏怖の響きをもって語られている。十六世紀のフランスに生き、占星学者であり、医者でもあったノストラダムス。だが、その名をこんなにもあらゆる時代において知らしめたのは、他でもない、彼の卓抜した未来予知能力だった。

彼はその力によって見通した未来を、秘密めいた数多くの詩として書き記した。そして、その詩の内容が、必ず現実のものとなっていくということが、遠い中世から現代に至るまで世の人々に大きな衝撃と恐怖を与え続けてきたのである。いくつか例を挙げておこう。次は、フランス国王アンリ二世（在位一五一九～五九）の死を予言した詩である。

【第一章三十五】

若いライオンが老いたライオンを打ち負かす
一対一の戦いの場で
金の篭の中の彼の目をつぶす
二人のうち一人が悲惨な死を遂げる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

この予言詩は、出版されてから四年後の一五五九年六月三十日適中している。この日、ハプスブルク家との和約を記念した騎馬試合に参加したアンリ二世は、スコットランド国軍の儀杖隊長であるガブリエル・ド・モンゴメリー伯と一戦を交えた。

王の希望によって行なわれた二戦目、観衆の面前で悲劇が起こった。モンゴメリー伯の槍が王の兜を突き抜け、目をつぶし、さらに脳にまで達してしまったの

第1章35

Le lyon ieune le vieux ſurmontera,
En champ bellique par ſingulier duelle,
Dans caige d'or les yeux luy creuera:
Deux claſſes vne,puis mourir,mort cruelle.

（1555年版）

若いライオンが老いたライオンを打ち負かす
一対一の戦いの場で
金の篭の中の彼の目をつぶす
二人のうち一人が悲惨な死を遂げる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

である。王は十日間も苦しみ続け、そして死んだ。

この詩は、何の書き落としもなく、あたかも、眼前で実際にそれを見たかのごとく王の痛ましい死へのプロセスが描かれている。

ライオンは、スコットランド国軍の紋章である。〝若いライオン〟とは、国軍に属していた若きモンゴメリー伯を指している。しかも、モンゴメリー伯自体、〝ル・リオン（ライオン）〟と呼ばれていたのだ。

それと同時に、このライオンは、占星学における国家の象徴でもある。ここはフランス。となれば〝老いたライオン〟がアンリ二世を暗示していたということもだれの目にも明らかである。

そして、彼はその予言どおりに、一騎討ちの果てに、運悪く金の篦のようになっている兜の隙間を突き抜けた槍によって目をつぶされ、死んだのである。

「予言者がこのように明白に語るとは！　ここまで正確に悪しきことを予言するとは、なんと呪われた予言者なのだ！」

秘書にノストラダムスの予言詩を持ってこさせたアンヌ・ド・モンゴメリー元帥は思わずうなったという。

アンリ二世の死後、人々は、第十章三十九の詩を密かにうわさし合った。次の詩の一行目が、アンリ二世の後を継いだフランソワ二世に関するものであるということが、あまりにも明らかであったからである。

【第十章三十九】
長男、未亡人、不幸な結婚
子供はなく、二つの島の間に不和
権限のない十八歳前に
もっと若い別の者に婚約が成立する
（オウム真理教翻訳チーム訳）

フランソワ二世（在位一五五九～六〇）は、アンリ二世と王妃カトリーヌ・ド・メディシスとの間に生まれた長男で、スコットランド女王メアリ・スチュアートと不幸な結婚をしていた。また、〝未亡人〟は、フランソワ二世の摂政となったカトリーヌ・ド・メディシスを指していることに異を唱える者はなかろう。

次第に健康状態を悪化させていったこの新王は、十八歳の誕生日を迎える六週間前に死んだ。

夫を亡くした子供のないメアリ・スチュアートは、スコットランドに戻り、女王となる。この戴冠式は二つの島の王国、スコットランドとイングランドの間に〝不和〟を生み、メアリ・スチュアートとエリザベス一世（彼女も〝子のない〟女王である）は、血塗られた権力抗争へと巻き込まれていった。最終的には、その不埒な行為のためにスコットランドを追い出されたメアリが、長い間ロンドン塔に幽閉された末に、エリザベス派によって首を切られ、エリザベスのライバルとしての座から姿を消すのである。

第10章39

Premier filz vefue malheureux mariage,
Sans nulz enfans deux Iſles en diſcord,
Auant dix huict incompetant eage,
De l'autre pres plus bas ſera l'accord.

（1568年版）

長男、未亡人、不幸な結婚
子供はなく、二つの島の間に不和
権限のない十八歳前に
もっと若い別の者に婚約が成立する

（オウム真理教翻訳チーム訳）

なお、最終行の〝もっと若い別の者〟は、フランソワ二世の後継者であったシャルル九世（在位一五六〇～七四）のことであり、彼は兄よりも若い年齢でオーストリアのエリザベスと結ばれている。

◉『ヨハネの黙示録』の次は「ノストラダムス」

これらの予言は、ノストラダムスの生存中に成就したが、彼は自分の死をも予言した。――ここでわたしはもうすぐ死ぬ――自らジャンスタディウスの暦にこう書き込み、さらに、

【プレザージュ一四一番】

使者が戻るとき、王の贈り物が置かれて
もうそのように振る舞うことはなくなるだろう　神のみもとに召されて
ごく近しい家族、友人たち、血を分けた兄弟

プレザージュ141番

Du retour d'Ambaſſade, don de Roy. mis au lieu,
Plus n'en fera. Sera allé à Dieu,
Parens plus prôches, amis, freres du ſang,
Trouvé tout mort prez du lict & du banc.

（1650年版）

使者が戻るとき、王の贈り物が置かれて
もうそのように振る舞うことはなくなるだろう
神のみもとに召されて
ごく近しい家族、友人たち、血を分けた兄弟
ベッドと腰掛けのそばで死んでしまっているのが見つかる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

ベッドと腰掛けのそばで死んでしまっているのが見つかる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

という予言詩を残した彼は、一五六六年、七月五日の早朝、「ベッドと腰掛けのそば」で死んでいたのだった。

先程も述べたように、彼の死後も予言詩は着実に現象化していった。そして、今後、現象化するであろうと考えられている詩が、まだいくつもあり、それらにはだれもが注目せざるを得ないのである。中でも、人類の滅亡を予言しているとされるこの詩は、この日本でも一大センセーションを巻き起こしたほどである。

【第十章七十二】

一九九九年七の月

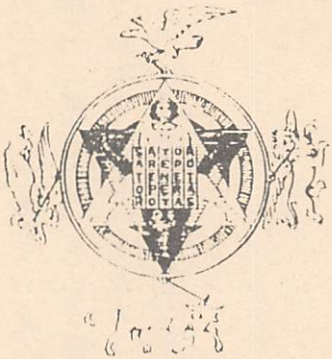
恐怖をまき散らす大王が天から降りてきて

第10章72

L'an mil neuf cens nonante neuf sept mois,
Du ciel viendra un grand Roy d'effrayeur,
Resusciter le grand Roy d'Angolmois,
Avant apres, Mars regner par bon heur.

（1672年版）

1999年７の月
恐怖をまき散らす大王が天から降りてきて
アンゴーモワの大王を甦らせるだろう
その前後に軍神が幸せに統治するだろう



アングーモワの大王を甦らせるだろう
その前後に軍神が幸せに統治するだろう

わたしも、ノストラダムスに強い興味を持っている一人である。一九八八年の終わりに、わたしは『ヨハネの黙示録』を解読し、『滅亡の日』という書籍として出版したが、その原稿を書いているときから、「次はノストラダムスだ！」という思いが胸の奥底から込み上げてくることをどうしても抑えることができなかった。

◉書き残したそのままの言葉を受け止めたい！

折しも、西ドイツ支部開設準備のために、ティローパ師がヨーロッパへと向かうこととなった。わたしは、早速彼にフランスでの資料収集を依頼した。なぜなら、他国語に翻訳されていない、ノストラダムスが書き記したそのままのフラン

ス語を慎重に訳し、そして解読していかない限り、正しい結果が得られないだろうという気がしたからである。訳す段階で、訳者の観念から訳語が選ばれるということを、わたしは恐れたのだ。

現に、この日本でも、ノストラダムスの予言詩集の日本語訳が出版されているが、疑問に思うような訳が実に多いのだ。また、これだけ適中している予言であるが、日本では翻訳ミスが原因か、あるいは単なる解釈ミスか、適中させた例がない。

そのため、

「ノストラダムスが書き記した、そのままの言葉を受け止めたい。」

とわたしは思ったのである。

また、日本で出版されている書物以外にも、ノストラダムスの残したものがあるはずであり、本場フランスでなら、日本で探すよりもはるかに容易に手に入るはずであった。

そんなわけで、ティローパ師に本探しをお願いしたのである。

やがて帰国した彼は、約束どおり何冊かのノストラダムスの著書を手に入れてくれていた。だが、それらに目を通したわたしは、これまで考えてもみなかったような事態に直面したのだ。なんと、同じ内容のフランス語版の詩集であるはずなのに、本によって詩句や表現が違っているのだ。

「これでは、ノストラダムス本人が、どの言葉を使って表現したのかがわからない！」

当然のことながら、「ノストラダムスが書き記したそのままの言葉を受け止めたい」というわたしの願いはかなえられないということになってしまう。一体どうしたらいいのだろうか？

「これは、もっともっと古い書物を探すしかない。できたら、ノストラダムスの時代のものを。しかし、そのためには、フランスへ飛ぶ必要がある。わたし自身が動かない限り、効果的な資料収集はまず不可能であろう。」

わたしは考えた。一九八九年一月の終わりのことであった。

◉封印を解くべき時は今

さて、今度は渡仏を前提にして、スケジュールを見直してみた。残念ながら二月は特に忙しく、新しい支部の道場開きが相次ぐ上に、シークレット・ヨーガ、イニシエーション等の予定が実に多い。

道場開きにしろ、シークレット・ヨーガ、イニシエーションにしろ、わたしが欠けるわけにはいかない。新しい道場はいつもわたしが祝福を与えた後に使い始めるのが常であったし、シークレット・ヨーガとイニシエーションもわたしの担当しているものが圧倒的に多い。

このシークレット・ヨーガとは、わたし、あるいは正大師（オウム真理教における第四段階に位置する大乗のヨーガの成就者）、正悟師（第三段階に位置するマハー・ムドラーの成就者。仏典における阿羅漢と同じステージ）による信徒と

の個人面談である。このとき、その人に必要な行法伝授がなされたり、アドバイスが行なわれたりするのである。

一方、イニシエーションとは、秘儀伝授のことである。つまり、このイニシエーションにおいて秘儀の瞑想法の伝授、あるいはエンパワーメント（霊的なエネルギーの移入）が行なわれるのである。これは、オウム真理教の教えであるマハーヤーナ（大乗）、タントラ・ヴァジラヤーナ（真言秘密金剛乗）、テーラヴァーダ（上座部）の中の、タントラ・ヴァジラヤーナの要素だ。タントラ・ヴァジラヤーナとは、普通だったら千生かかるとも二千生かかるともいわれているマハーヤーナの修行を、わずか一生から数生で終わらせてしまうという大変スピーディーな、しかし、ややもすると危険に陥りがちな修行体系である。そして、そのスピードをいっそう上げるために、また、安全に確実に最終段階へと到達できるようにするために、グル（宗教上の指導者）によるイニシエーションは欠くべからざるものとなっているのである。

「これでは、とうていフランスに行くのは無理だ。」

わたしはため息をつき、二月に渡仏することを断念しかけた。

が、どうしても気にかかる。本当にこれでいいのだろうか？　わたしは今、フランスへと飛び情報収集をしなければならないのではないのだろうか？　ノストラダムスの予言の封印を解くべき時が来たのではないだろうか!?——そうなのだ。封印を解くことのできるのは、このわたししかいないのだ！

また、わたしを導き、守護してくださっているシヴァ大神もそれを望まれているのだということもひしひしと感じた。シヴァ大神のご意思ならば、何としてでも実現しなければならない。もう一度スケジュールを見直してみようか？

うーん……無理すれば、二月十三日から二月十八日まで、何とか取れないこともない。十三日に大阪支部を出、成田国際空港へと直行する。そしてフランスへ飛び、十八日には帰国し、そのまま仙台へ向かえば、仙台支部の道場開きに間に合う。

だが、この日程だと、現地で目的のために使えるのは、わずかに三日間だけだ。ノストラダムスの軌跡をたどって、パリ以外へも行かなければならないかもしれない。そうなるとますます時間的ゆとりがなくなってしまう。こんな状態で情報収集が可能であろうか？

いや、可能であれ、不可能であれ、必ず成功させねばならない。今やその時なのだ。きっと運がわたしに味方してくれるに違いない。いつしか強い確信が生じていたのだった。

◉ノストラダムスの故国、フランスへ

わたしはすぐさま同行者の人選と、事前調査の準備にかかった。

人選に関しては、機動力を重視、リーダー格の五名の成就者（いずれかのヨーガを成就し解脱した弟子のこと）とフランス語通訳のできるサマナ（オウム真理教の出家修行者）三名という思い切った構成とした。

すなわち、マハー・ケイマ正大師、ヤソーダラー正大師、マンジュシュリー・ミトラ正悟師、プンナ・マンターニプッタ正悟師、マハーカッサパ師と通訳としてウッタマー師、スワミ（第一段階のラージャ・ヨーガの成就者）であるヴァジラロカ、ヴィマラの三名である。

「これだったら、いざというときにも安心して数グループに分かれて活動することができよう。」

なお、通訳の三人は当時はまだ成就者となっていず、ホーリー・ネームを授与されてはいなかったが、一応現在の名前を使わせていただくこととする。

さて、彼らはわたしの期待を裏切ることなく、出発前から入念な調査を開始した。

まず、ヴィマラが東京の日仏会館を通じて、南フランスのモンペリエに一五六八年版の詩集があるという情報を得た。

ここには一二八九年創立のヨーロッパ最古の医学部を持つモンペリエ大学があるが、このモンペリエ大学の蔵書の中にそれがあるという。ここで、ノストラダムスは医学を学び、一五三四年に医学博士の資格を得ている。したがって、この地はノストラダムスゆかりの地といえよう。

◉モンペリエ時代のノストラダムス

もう少し詳しくノストラダムスに触れてみることにしよう。モンペリエ大学を卒業する前後までのノストラダムスはどのような人生を送ってきたのだろうか？

ノストラダムスについて調べてみるとき、一五〇三年にサン・レミ・ド・プロバンスで生まれたノストラダムスが、母方の曽祖父ジャン・ド・サン・レミの影響を受けていることに気付く。

ジャン・ド・サン・レミは、「町の名士であり、賢人であり、医者であり、非常に博学な長老的存在であった」とM・C・トウシャールは書いているが、本当

にこの人物は、ルネ王室に占星術師として迎えられたほどの星に対する知識を持っていたばかりでなく、数学、植物学、神、詩、科学実験など、あらゆる分野に対して強い興味と知識を持っていたらしい。そして、このジャン・ド・サン・レミに子供時代のノストラダムスは教育を受けたのである。このころ習得したものが、ノストラダムスの生涯における勉学の基礎となっていただろうことは想像に難くない。事実、彼の予言詩の中にも、頻繁に占星術等の知識が出てきている。

ジャン・ド・サン・レミの死後、ノストラダムスは学校教育を受け始めるが、アビニョンで古典、トゥールーズで法学を学んだ彼がヨーロッパでも名門中の名門とされたモンペリエ大学の医学部に入学したのは、一五二一年ごろとされている。

後の彼の医師としての名声を特に高めたのはペスト治療であったが、ペストの研究に没頭したのもこのモンペリエ時代であった。

ノストラダムスは、生涯に何度か放浪の旅を経験している。大学時代にも放浪

し、ペスト治療を行なったり、多くのユダヤ人（ノストラダムス自身もユダヤ人の血統であった）から錬金術やカバラの秘儀などを学んだりしている。

一五二九年（他説もある）、博士号の取得を認められ、医師となったノストラダムスは、新たなる土地へと旅立つ。

◉傑出した予知能力は〝ユダヤの秘儀〟の産物!?

ぜひともここで付け加えておかなければならないと思うことがある。それは、ノストラダムス家も母方のサン・レミ家も、聖書に登場するイザヤ部族の末裔として、秘儀とされる多くの書物を所有していたということである。

ノストラダムスが、それらを譲り受けていたことはほぼ間違いない。しかし、彼はそれらをこの世から抹殺してしまっている。

「そして、この神秘的な哲学は非難されるものではなかったが、彼らの気違いじみた信条（迫害のことを言っている）をひき起こすことをわたしは望まなかった。とはいえ、幾世紀もの間、隠されていた数巻の書物がわたしに示されたのだ。しかし、読んだ後、起こるであろうことを疑ったのでウルカーヌスにそれらを捧げてしまった（燃やしてしまった）。ウルカーヌスがそれらを焼き尽くしてしまう間、空をなめる炎は異常な輝きを発し、自然の光よりも明るく閃光を放つクリストルの火の光のように、家の中を急に照らした。まるで家が突然の大火に見舞われたかのように。」

〈『諸世紀』序文・息子セザールへの手紙より〉
（オウム真理教翻訳チーム訳）

と、ノストラダムスは記しているのだ。

ノストラダムスの傑出した予言能力は、このユダヤに伝わる秘儀が生み出した

ものなのかもしれない。

錬金術や占星学をはじめとする西洋の神秘思想は、そのほとんどがユダヤの神秘思想に起源を発するといわれているが、この神秘思想が形成しているのが〝カバラ〟と呼ばれるユダヤ教の中の秘教である。

ユダヤ教の思想体系によれば、『トラー』と呼ばれる基本的な教えがあり、その上に『タルムード』、さらにその上に〝秘中の秘〟と呼ばれる最高位の奥儀『カバラ』があるのだという。すなわち、それはユダヤ神秘思想の最奥儀なのだ。

オウム真理教では大乗（マハーヤーナ）、真言秘密金剛乗、上座部（テーラヴァーダ）という三乗の仏教の教えを説いているが、このカバラに仏教との類似点が見いだされる。わたしは、『えんじょい・はぴねす』という月刊誌で『宗教は一つの道』という記事を連載しているが、この点も宗教は一つの道であることの証明となり得よう。

「カバリスト（カバラの修行者）の最終目標は、他のすべての神秘家や密教修行者のめざすものと同様に、神に帰すことである。この神への帰還の道は、宇宙開闢つまり天地創造過程を逆方向にさかのぼらなくてはならない。天地創造とは無から有への展開であり、……カバラ聖典『セーフェル・イェツィラー』（創造の書）によれば、そのことは原初の中心から光が誕生したと表現されている。この中心が宇宙の中心であり、また時間の中心でもある。そしてこの中心は『内なる楽園』を内包し、神秘によって守り隠されている〝点〟であり……ひとえに、大宇宙と小宇宙（人間）とが対応関係にあり、両者間の要素とエネルギーは同一だという認識の上に立つからである。」

（『世界神秘学事典』より）

「この神への帰還の道は、宇宙開闢、つまり天地創造過程を逆方向にさかのぼらなくてはならない。天地創造とは無から有への展開であり」というところは、サ

キャ神賢（仏陀釈迦牟尼）がお説きになったいわゆる「十二縁起の法」を彷彿とさせる。

オウム真理教ではこの教えを原始仏典の言語であるパーリ語から正確に訳し、「十二の条件生起の段階」と呼んでいるが、簡単に述べるならば次のようなものである。

わたしたちの真我（わたしたちの本質）は、無始の過去においては、絶対自由であり、絶対幸福であり、絶対歓喜の状態にあった。

ところが三グナの干渉を受けることによって、迷妄の世界、苦しみの世界へと落ちていってしまったのである。三グナとは、ラジャス、タマス、サットヴァといわれている三つのエネルギーのことである。ラジャスとは熱エネルギーを意味し、タマスとは音のエネルギーを意味し、サットヴァとは智慧と光のエネルギーを意味している。

これら三つのエネルギーが真我に干渉したわけだ。そして、この三つのエネル

ギーのダイナミックな動き、美しさ、光に感応した真我は、その中へと没入したのである。そのとき、ものすごい大きな爆発が生じた。これが現代物理学でいうビッグバンに相当する。

このとき、非形状界（コーザル世界）が誕生し、真我はこの世界での経験を始める。ここは、光がデータとして存在しているという、ただそれだけしかない世界である。

しかし、経験によって裏付けられた識別作用がここで生じるがゆえに、よりいっそう具体的な経験、具体的な欲求を充足しようとして真我は再び動き出す。そして、心の要素と形状-容姿でできた世界をつくり出すのである。これは、形状界（アストラル世界）と呼ばれている。

このときの形状-容姿は、あくまでも形状界の形状-容姿であり、現在のわたしたちの肉体のような粗雑な物質でできているわけではない。微細な物質でできているのである。

しかし、この形状-容姿には、わたしたちがこの肉体で感じる感覚よりずっと強い感覚が内在している。

この形状-容姿と心の要素が、次に〝六つの感覚要素と対象〟を働かせることになる。六つの感覚要素と対象とは、眼識、耳識、鼻識、舌識、触識、意識の六つである。それによって感覚が生起する。

この感覚の生起によって、渇愛が生じ、とらわれが生じ、いよいよ低位形状界へと落ちてゆき、より具体的なものを求めようとする。

それによって真我は今わたしたちが生きている愛欲界（現象界）をつくり出し、この世に生まれ出たのである。そして生・老・病・死・愁・悲・苦・憂・悩というこの世での苦しみを味わうこととなる。

このプロセスをまとめると表1のようになるが、もっと詳しく知りたい人には拙書『タターガタ・アビダンマ――真理勝者　絶対最勝の法則』（オウム出版）を読んでいただくことにして、話を次に進めたい。

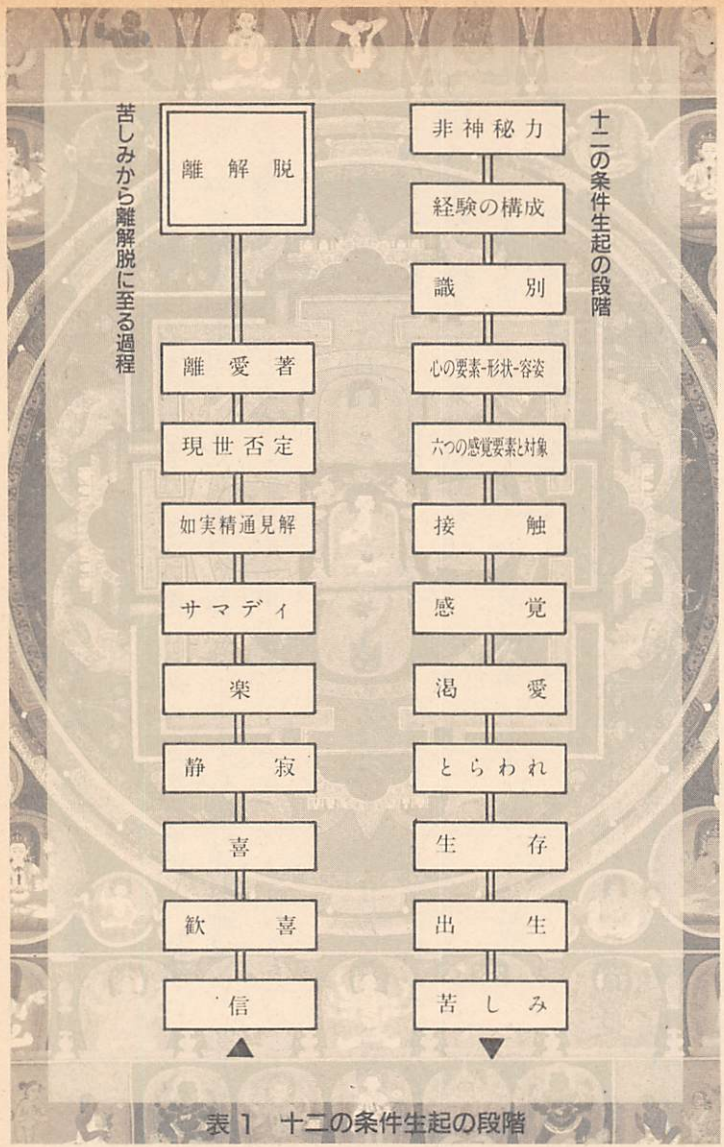


表1　十二の条件生起の段階

以上のことからもおわかりのように、非形状界、形状界、愛欲界のできていくさまは、〝無から有への展開〟であるといえよう。

そして、わたしたち修行者は、この苦しみの世界から解脱し、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界へと立ち返ろうとして――それが可能な魂は、二度と三グナの影響を受けることのないマハー・ボーディ・ニルヴァーナへ入ろうとして修行をするのである。

この点はカバラとは違っているといえるだろう。つまり、仏教には、無始の過去に真我が存在していた世界（ニルヴァーナ）よりも、はるかに高い世界へと到達するための教えがあるのである。

なお、『大宇宙と小宇宙（人間）が対応関係にある』という見解は、仏教の見解と全くもって一致している。

同じく、カバラにはステージを上げていく秘伝として瞑想や呼吸法などがあり、それはただ一人の師に従って、口頭伝授されるものであるという。その具体的内

容についてはわたしの知るところではないが、仏教でも瞑想や呼吸法は欠かせないものであり、秘儀に属するものは、イニシエーションによって、グルから弟子へと口頭伝授されるのである。

◉瞑想によって未来を見る

さて、このようなノストラダムスの経歴を見てみると、彼は瞑想によって未来を見ているのではないかと考えられるのだ。瞑想に熟達してくるとサマディ（三昧）に入ることができるようになる。そして、サマディに入ったとき、様々な神通力が発現するのだ。もちろん、未来を見通す力も、神通の一つである。事実、彼の予言詩集『諸世紀』は最初に次の二つの詩が載せられてる。彼の血統の中には、霊的な能力を持つ人が多かったと伝えられているが、そういう人たちも瞑想によって神秘力を得ていたのかもしれない。

【第一章二】

夜、秘密の書斎で
一人、真鍮の椅子に座って休んでいると
小さな炎が静寂の中から飛び出し
無意味とは思えないことを告げる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

【第一章二】

予言の神アポロンの三脚台の真ん中で　ヘルメスの杖を手に持ち
水によって事の成り行きと詩のもとを形作り
弱者たちのために恐怖し声が震える
神の栄光、神はすぐそばにいる

（オウム真理教翻訳チーム訳）

第1章1

STANT aſsis de nuit ſe-
cret eſtude,
Seul repouſé ſus la ſelle d'æ
rain,
Flambe exigue ſortant de
ſolitude,
Fait proferer qui n'eſt à croire vain.

（1555年版）
夜、秘密の書斎で
一人、真鍮の椅子に座って休んでいると
小さな炎が静寂の中から飛び出し
無意味とは思えないことを告げる
（オウム真理教翻訳チーム訳）

第1章2

Laverge en maĩ miſe au milieu de BRANCHES
De l'onde il moulle & le limbe & le pied.
Vn peur & voix fremiſſent par les manches,
Splendeur diuine. Le diuin prés s'aſsied.

（1555年版）
予言の神アポロンの三脚台の真ん中で
ヘルメスの杖を手に持ち
水によって事の成り行きと詩のもとを形作り
弱者たちのために恐怖し声が震える
神の栄光、神はすぐそばにいる
（オウム真理教翻訳チーム訳）

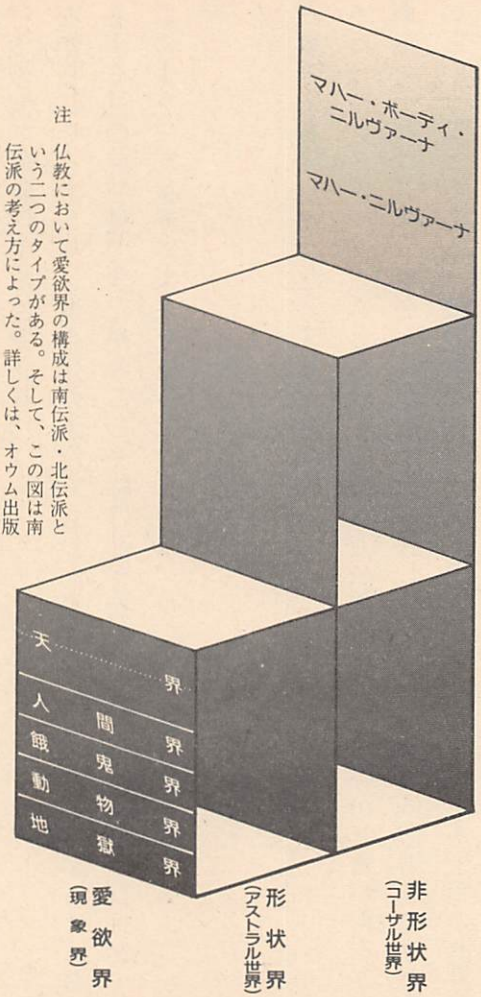
これらの詩によって、ノストラダムスがどのようにして予言の霊感を得ていたかということがわかってくる。それによると、彼は秘密の書斎で一人座って静寂に浸っていたり、杖や水を使って精神集中をしていたらしいことがわかる。むろん深い瞑想に入るためである。

そして深い意識状態へと自らを導き、形状界（アストラル世界）へと入って未来の出来事を見たに違いないのだ。

既に説明したが、この宇宙は非形状界、形状界、愛欲界という三つの世界から成り立っている。そしてわたしたちは愛欲界の中の下から四番目の世界である人間界へと生を受けているのである（図1）。

非形状界は光がデータとして存在している世界である。ここには無始の過去からはるかなる未来に至るまでのすべてのデータがあるのだ。この光のデータが、形状界へと降り、ここで微細物質で構成された様々なものを形づくる。そして、深い瞑想に入れる者は、変化身という異次元の身体を使って形状界へと入り、こ

図1



注　仏教において愛欲界の構成は南伝派・北伝派という二つのタイプがある。そして、この図は南伝派の考え方によった。詳しくは、オウム出版刊・『マハーヤーナ』NO31「ダルマ&ダルマ――マハー・ムドラーへの道」参照。

こで未来の出来事を見たり体験したりすることができるのである。

さらにこの形状界が愛欲界に投影され、形状界で起こったことと全く同じことが、この世で現象化するのである。

だからこそ、アンリ二世の死の予言でもわかるように、ノストラダムスはあたかもすぐ目の前で見てきたかのごとく詩に書き表わすことができたのである。

このように形状界で未来を見るというのは、わたしの予言の方法の一つでもある。

◉占星術にも詳しかったノストラダムス

もう一つノストラダムスとわたしの予言方法が同じではないかと思われることがある。それはノストラダムスが占星術に詳しく、それを予言に応用していたらしいということである。彼の曽祖父ジャン・ド・サン・レミはルネ王室の占星術師であり、子供のころのノストラダムスが彼から教育を受けていたことは先に述

べた。

ノストラダムスも一五四七年にサロン・ド・プロヴァンスに住み始めたころには、占星術師としての名声が知れ渡っていたという。崖の上にある彼の自宅の最上階には、星の運行を瞑想し研究するための観測所があった。

そして、わたしも占星学の研究者なのだ。ここ二～三年忙しさのあまり占星学による予言を発表していないが、毎月翌月に起こるであろう出来事を予言していた時期もあった。その占星学はわたしが『大宇宙占星学』と名づけたもので、大変人気を呼んだものである。

『神通力　麻原彰晃は魅せた』（オウム出版）にはこう説明されている。

◆大宇宙占星学

◎驚異の適中率、究極の占星学とは……

麻原尊師が、六十三年三月より月間書籍『マハーヤーナ』に連載されている、

この「大宇宙占星学」こそ、究極の占星学と呼ぶにふさわしいものです。

『マハーヤーナ』に連載しているものは、発売月のデータ、予想が載りますので、そこでのコメントはすべてが事件以前のもの、すなわち予知になっているのです。

それでは、「大宇宙占星学」の適中例を挙げてみることにいたしましょう。

『マハーヤーナ』NO8の土星の欄には、こういった記述があります。

「土星が弱い期間（三月十五日から四月九日）……（中略）……地震の危険性もあります。」

さらに、その要注意日として三月十八日が挙げられていました。

そして、三月十八日早朝のことです。関東地方に地震が起きたのです。その震源は東京都東部、深さ九〇キロ、マグニチュード六・一といったもので、千葉では震度四、東京では震度三が記録されたのです。

また、『マハーヤーナ』NO9の天王星の欄には、こう書かれています。

「ただし後半は、新しい発見からくる事故や航空機事故の恐れがあります。」

そして、その要注意日としては四月二十九日が挙げられていますが、その日にはハワイでアロハ航空機の天井が吹き飛ぶという事故が起きたのです。

このように、「大宇宙占星学」では、事件の起きる正確な日付までを当てることが可能なのです。また、他に適中した主な事件について挙げてみることにいたしましょう。

・四月十八日　アメリカ・イランのペルシャ湾の軍事衝突
・六月一日　米ソ首脳会談の行き詰まり
・六月十二日　アルゼンチンの航空機事故
・六月二十六日　フランスの新型エアバス墜落事故
・七月三日　アメリカ海軍のイラン航空エアバス撃墜
・七月七日　北海油田爆発

・七月八日　インド南部の列車事故
・七月二十一日　中国地方での集中豪雨
・七月二十三日　海上自衛隊潜水艦「なだしお」と大型釣り舟の衝突事故
・七月二十六日～　伊豆半島東方沖の群発地震

ざっと挙げただけでも、これだけの事件が適中しています。細かい事件を入れたら、数限りなく適中しているのです。

それでは、どうしてこんなに当たるのでしょうか。まず、「大宇宙占星学」の特徴を挙げてみましょう。

①「立向」と「座山」という二種類の吉凶の見方がある
②実際の惑星の動きと位置を、コンピュータで三次元的に高速解析している
③アストラル世界の特別な変数や資料を使っている

④大宇宙の巨大なエネルギーを考慮している
⑤大宇宙占星学を使いこなすには、「天の時」「地の利」「人徳」「インスピレーション」が必要不可欠である

そもそも「大宇宙占星学」は、尊師が、アストラル世界のグルの一人であるマニクラチューより、秘儀を伝授されて始まったものです。それは、特徴③にもあるとおり、アストラル世界のデータが重要なポイントを占めるものなのです。つまり、尊師の神通力が、この驚異の適中率をもたらしたといえましょう。事実、「大宇宙占星学」の予知においては、尊師の神通力は不可欠なものなのです。

さあ、あなたも『マハーヤーナ』で、この「大宇宙占星学」の驚異に触れてみませんか。

◉〝中世〟という暗黒時代の中で

さて、二カ月前からわたしは『えんじょい・はぴねす』という月刊誌で、同じように翌月の予想を連載し始めた。占星学や未来に興味のある方は、ぜひこれをお読みになることをお勧めする。

ところで、話は元に戻るが、ノストラダムスは先祖から受け継いだユダヤの貴重な書物を燃やしてしまった。それはなぜであろうか？

「彼らの気違いじみた信条（迫害）をひき起こすことをわたしは望まなかった」とはどういうことなのか？

それを理解するためには、まず中世という暗黒の時代についての理解を深めねばなるまい。

「かくして、一五三四年一一月一〇日、七名の者が、燃えさかる松明を積んだ荷車の中で生きたまま焼かれ、非を認めるよう命ぜられた。最初の者は、靴屋の息

子・不具者のバーテルミー・モロンであり、彼は、前述の檄文を所有していた。このため、彼は、サン・ジャンの墓地で生きたまま焼き殺された。二番目の者は、ジャン・ドュ・ブルジュという富裕なラシャ職人。彼は黒馬印の看板を掲げてサン・ドニの街に住んでいた。彼は、ノートルダム寺院の前で非を認めさせられた後、ノイサン墓地で手首を切り落とされ、さらに同志を糾弾しようとしなかったことを理由に、中央市場で生きたまま焼かれた。三番目は、サン・ジャック街の印刷業者。彼はルターの本を印刷したということで、モーベール公園で生焼きに処された。十一月十八日には、ルターの本を売った石工が、前述の広場で焼き殺された……」

（『大予言者ノストラダムスの謎』〈大陸書房〉より）

以上はパリのニコラス・ベルソリスの証言であるが、この時代カトリック（旧教）に対していったん異端の疑いをかけられた者に命の保証はなかった。それが

事実であろうとなかろうと。拷問が公認され、密告が奨励されていた。

そして、ノストラダムスも異端視され始め（それでなくてもユダヤ人は迫害されてきた）、異端糾問所へ呼び出されかねないという窮地に立たされることとなった。

妻と二人の子供をペストによって失っていたこともあって、ノストラダムスは迫りくる危険から逃れ、三たび放浪の旅へと旅立ったのであった。

以後もノストラダムスは慎重だった。したがって秘密の書物を燃やしてしまったのも、弾圧を避けるためであったろうことは想像に難くない。

また、ノストラダムスはペストの伝染方法を発見し、パストゥールよりも四世紀早く「防腐的処置法」を発明しているが、彼はそういうことも隠した。当時の人間にはそれが魔術にしか見えず、魔女狩りの対象となり得る危険があったからである。

このような事情を考えてみると、ノストラダムスが自らの予言を、難解で謎め

いた詩に変えてしまったのも無理からぬことと思われる。あまりにもはっきりと未来の出来事を描き出し示したとしたら、そのときどきの権力者たちによってこの予言書は抹殺され、今日まで伝わることもなかったであろう。

しかし、これほど難解にしてまでも予言を残そうとしたのはどうしてなのだろうか？　やはり、後世のだれかにそれを伝えたかったからだと考えるのが妥当であろう。

彼は、

「それ（占星術）によって、不眠不休と計算をともなった霊感や神秘的な啓示のおかげで、わたしの予言は文書にされた」

と言っている。となると、占星術、霊感、神秘的な啓示等を理解し、体験している者になら、彼の詩を解読することができるような気がしてならない。それは、つまりわたしだ！　わたしでなければ、正確に彼のメッセージを受け取ることができないのだ！

わたしは自分の教えを隠さなかったし、秘儀の伝授に値する、あるいは、エンパワーメントに値すると認められる直弟子や信徒には、どんどんイニシエーションを与え続けてきた。そして、弟子や信徒は、ある者は解脱という素晴らしい心の解放を得、ある者は神通力を得といった具合に、人間を超えて神や覚者（仏陀）へと近づいていっている。

しかし、それがこのあまりにも物質化しすぎたこの日本では、既成の価値観を覆すものとして恐れられたらしく、国家的な宗教弾圧、オウム・バッシングが起こっている。これがノストラダムスの時代だったらきっと宗教裁判にかけられてしまっていただろう。異端者として、あるいは魔女として——。

わたしはハッと気づいた。今やわたしはオウム・バッシングを乗り越えた。恐れるものは何一つない。今だったら正々堂々と神秘力を使って予言を解読し、公表しても何の弾圧も加えられることはないだろう。それがわずか数年先に起こる出来事であったとしても、たとえ人類の破局が予言されていたとしても！

「やはりわたしが封印を解く時期に来ていたのだ。」
わたしの確信は深まっていくのだった。

◉もたらされた素晴らしい情報

さて、再び話を三年前に戻そう。

このモンペリエに、一五六八年版というごく初期の古文書があるというのだ。早速渡仏メンバーの一人がモンペリエ大学に国際電話をかける。そして、その詩集が四行詩、六行詩、それからノストラダムスが息子とアンリ二世にあてた手紙から構成されており、その中にはまだ日本で紹介されていないものが含まれているということを突き止めた。

ところがである。肝心の詩集は、一九四三年に盗難に遭い、いまだ見つかっていないのだという。熱狂的なノストラダムスのファンの仕業だろうか？——わたしたちは、期待のすぐ後に落胆を味わうこととなった。

しかし、一縷の望みをかけて、モンペリエに住んでいる日本人女性Mさんにモンペリエ大学の蔵書の調査を依頼することにした。Mさんはウッタマー師の友人である。

それに並行して、パリの国立図書館にも当たった。一五六八年版よりは新しいというものの、やはりノストラダムス関係の資料があるのだという。

ただし、その閲覧には推薦状が必要だということだったため、フランスの日本大使館の広報文化センターに何度か国際電話をかけた。そして、広報文化センターが推薦状を書いてくれるのは確かであろうというところにまでこぎ着けたのである。

一方、Mさんによって、モンペリエ大学での詩集の盗難が確認された。しかし、Mさんはわたしたちにいくつかの素晴らしい情報をもたらしてくれたのだ。

一つはMさんの友人の知り合いに、ノストラダムス研究家として有名なフォン

ブリュヌという人がおり、この人に会えるかもしれないというもの。

フォンブリュヌ氏は『ノストラダムス――歴史家にして予言者』の著者でもある。本書は、ノストラダムスの予言詩集『諸世紀』の解読書であり、西ヨーロッパに大変なノストラダムス・ブームを巻き起こした。ノストラダムスの謎多き詩を解読することによって、ノストラダムスが今の時代を予言していた出来事を、事前に発表、それが鮮やかに適中したからである。

わたしも、彼の一九八一年五月のフランス大統領選挙でのフランス社会党のミッテランの勝利とそれに続くローマ教皇の運命を適中させたことが新聞報道までされたことを覚えている。

それは次の詩であった。

◉鮮やかに適中したフォンブリュヌ氏の解釈

【第二章九十七】

ローマ教皇は近づかない
二つの川が流れる町（リヨン）に
彼の血と一族の血がその近くで流れる
社会党が誕生するときに

（フォンブリュヌ解釈）

〝社会党の誕生〟、つまりミッテラン大統領誕生が一九八一年五月十日。果たして、わずか三日後の十三日、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、二発の銃弾を膵臓部分に浴びて倒れた。サンピエトロ広場で、一般謁見の最中に狙撃されたのである。

第2章97

Romain Pontife garde de t'approcher
De la cité que deux fleuves arrose(7) :
Ton sang viendra auprès de là cracher,
Toy et les tiens quand fleurira la Rose(8).

（1605年版）

ローマ教皇は近づかない
二つの川が流れる町（リヨン）に
彼の血と一族の血がその近くで流れる
社会党が誕生するときに

（フォンブリュヌ解釈）

幸いにも、教皇はかなりの重傷と報道されながらも一命は取り留めたが、この事件も適中したとして話題を呼んだ。

そして、『ノストラダムス――歴史家にして予言者』の方も、ミッテラン大統領誕生、ローマ教皇暗殺未遂事件と相次いで解釈が適中したために、突如としてベストセラーにのし上がったのである。それに加えて、フランスの大手雑誌社がフォンブリュヌ氏とその著書に関しての特集を組んだりしたものだから、本場フランスに巻き起こったノストラダムス・ブームはいっそう大きくなり、フランス全土どころかヨーロッパ中を震撼させるほどに発展していったのだ。

日本にも、この異常ブームが伝えられてきたので、既に氏の名前をご存じだった方も多いことだろう。

こんなにもノストラダムスの予言詩解読に成功したフォンブリュヌ氏に会えるかもしれないというのだ。これは大変楽しみなことである。

なお付け加えるならば、彼は、もう一つミッテラン大統領誕生を予言していた

詩があったとして、後に次のような詩の解き方をしている。

【六行詩四十四】
バラ（社会主義）がフランスで尊敬され
そのリーダー（F・ミッテラン）がついに求められる
五十年と少し後、（国家に対する）熱狂者が生まれる
五年後、社会主義は大人物（F・ミッテラン）に感動し
非難者たち（政治的攻撃）に打撃を受けない
なぜなら十五年後、天の助け（ユダヤ人とカトリック教徒）を受けるから
（フォンブリュヌ解釈）

〝五十年と少し後、（国家に対する）熱狂者が生まれる〟というのは、一九一六年にミッテランが生まれ、その五十年と少し後の一九六六年五月五日に、彼が

反政府組織をつくったことを指す。

その五年後、つまり一九七一年六月、ミッテランは新社会党を組織する。そして、まさに十五年の後（一九六六＋一五＝一九八一）、ミッテランは現職のジスカール・デスタンを破って第五共和制下初の社会党出身の大統領となったのである。

この詩の中に出てくるバラがフランス社会党の象徴であり、実際にそれが社会党のシンボルマークとして使われていた。そして、大統領選挙に当選したミッテランも、一本のバラを手にしていたのである。

◉生前に出版された予言詩集が残っている!?

さて、Mさんからの情報の第二は、モンペリエ大学で盗難に遭ったものと同一の書物が、リヨン、サン・レミ・ド・プロバンス、サロン、カルパントラという四つの町にあるかもしれないというものである。

このうちのリヨンは、フランス中東部、リヨネ地方の中心都市で、ローマ県の

6行詩44

La belle rose (1) en la France admirée,
D'un très grand Prince (2) à la fin désirée,
Six cens et dix, lors naistront ses amours
Cinq ans après, sera d'un grand blessée (3),
Du trait d'Amour (4), elle sera enlassée (5),
Si à quinze du Ciel reçoit secours.

(1605年版)

バラ(社会主義)がフランスで尊敬され
そのリーダー(F・ミッテラン)がついに求められる
五十年と少し後、(国家に対する)熱狂者が生まれる
五年後、社会主義は大人物(F・ミッテラン)に感動し
非難者たち(政治的攻撃)に打撃を受けない
なぜなら十五年後、
天の助け(ユダヤ人とカトリック教徒)を受けるから

(フォンブリュヌ解釈)

県都でもある。また、ノストラダムスの古い時代の本の多くがここで出版されたという歴史を持つ。

しかも、ノストラダムスについての研究を続けているノストラダムス協会もこのリヨンにあり、この協会には、一五五五年に出版された『諸世紀』の初版本をはじめとして、ノストラダムスに関係する文献がかなりそろっているということである。

一五五五年！　ということは、ノストラダムスの生前だ。そのすべての予言詩がノストラダムス自ら書き記したものであることは間違いあるまい。つまり、後世の人間の手は加わっていないのだ。なんと価値のある文献であることか！　わたしの必要としていたものは、まさにこの類の本なのだ。

「ノストラダムス協会でそのコピーをもらうことができそうです。」

Mさんは言った。

「リヨンは外せない。」

そんな気がした。

なお、リヨンの他に資料があるかもしれないという残り三つの町のうち、サン・レミが先にも触れたようにノストラダムスの生誕地、カルパントラは、ノストラダムスが放浪時代に滞在した場所の一つである。彼は長い間放浪の旅をしているが、その驚異的な未来予知能力が現われ出したのはそのころのことだと伝えられている。

そしてサロン。ここはノストラダムスが一五四七年以降、宮廷に招かれて侍医を勤めた期間を除き、死ぬまで過ごした町だ。ここでノストラダムスは二度目の結婚をし、六人の子を持った。中でも一五五三年に生まれたセザールは特に有名である。

ノストラダムスはここで書かれ一五五五年に出版された『諸世紀』の序文として『セザールへの手紙』を書いている。わずか一～二歳の息子にあてて書いているように見せかけながら、実は万人の読む予言詩集に入れてあること、他の詩と

同様に実に難解な言い回しをしていることを考えてみると、この中にノストラダムスの詩を解読する鍵が隠されているのかもしれない。

だが、予言者が予言者の書き記した詩を読むのに果たして鍵が必要であろうか？そういう理由から、わたしはこの序文の解読には力を入れていない。

リヨン、サン・レミ・ド・プロバンス、サロン、カルパントラ――これらノストラダムスゆかりの町にあるかもしれないというノストラダムスの予言詩。だが残念なことに日本を発つまでにこれらの町の図書館の蔵書を確認することはできなかった。

Mさんがもたらしてくれた情報の第三は、ショマラ氏と連絡を取ることができたということだった。ショマラ氏はノストラダムス研究家であり、ノストラダムス関係の文献の研究者としても知られている人だ。ノストラダムス協会のリーダーでもある。

彼はわたしたちの日本からの問い合わせに対して興味を持っているということで、リヨンへ行けば会ってもらえるらしい。

また、リヨンの市立図書館の古文書課の知り合いも紹介してくれるという。その知り合いに頼めば、普通ならば不許可となっていることでも融通が利くというのである。これは資料収集に大変有効となりそうだ。

そして、残る最後の情報は、パリの国立図書館に、一六〇〇年、一六〇五年、一六一〇年、一六四九年に出版されたものが、リヨンの市立図書館に一六九七年のものがあるということであった。このうち一六〇五年版が例の盗難に遭った一五六八年出版の予言詩集の複写本なのだそうである。

だいぶ希望が見えてきた。出版前にこれだけの情報を得ることができたのだから。ひょっとしたら三日でも何とかなるかもしれない。

わたしたちは出発の直前になって、パリに到着したその日のうちにリヨンに直行することを決め、成田を発った。

西ドイツ・ボン支部のヴァジラティクシュナー師にもリヨンへ来ておくよう指示しておいた。

第二章

ノストラダムスの故国、フランスでの資料収集

◉さい先の良いスタート

成田――パリ間は直行便で十二時間余り。パリからはどのようにしてリヨンまで行こうか？　到着後は一時間たりとも無駄にするわけにはいかない。

パリからリヨンまで飛行機で一時間五分であると聞き、成田空港から全員の予約を入れておいた。しかし、世界一のスピードを誇るフランスの列車ＴＧＶを使うという手もあり、どちらにするとも決定し難い。

わたしが、インスピレーションによってＴＧＶを選択したのは、既にパリのシャルル・ド・ゴール空港に到着してからだった。すぐさま、ＴＧＶの発着駅へとタクシーを飛ばし、発車の八分前という、いわばギリギリの状態で乗り込むことができた。リヨン・ペラーシュ駅まで二時間十三分だ。確かに日本の新幹線に比べても格段に速い。最高時速は二七〇キロだという。

それでも日本からはやはり遠い。リヨンに到着したのは、シークレット・ヨーガを終えて大阪を発ってから、実に二十七時間後のことであった。

わたしがＴＧＶを選択したことが正しかったと知ったのは、リヨンに着いて間もなくのことだった。飛行機は霧のために到着が大幅に遅れていたのだ。それも、いつになるのかさえもわからないような状態だったのである。

このように、間一髪で難を逃れるというインスピレーションが働き出したということは、うまく流れに乗ってきたことを意味している。流れに乗ることさえできれば、今回の情報収集はおのずと成功する！　まさにこれからの三日間を占うに当たっては、さい先の良い出来事であった。

◉真夜中の作戦会議

ボン支部からやってきたヴァジラティクシュナー師ともリヨンのホテルで合流し、疲労を押してのミーティングを始める。能率的に動くためには、まず行動予定を立てねばならなかったからだ。深夜のロビーが会議室となった。

ウッタマー師が、リヨンで調べるべき場所をピックアップする。

「市立図書館、もう一つある小さな図書館、ノストラダムス協会――、あと文化博物館と歴史博物館がありますが、こちらはどうしましょうか？」
「一応加えておこう。資料がなかったらそれはそれでいいが、確認だけはしておくべきだ。」
「ガロ・ローマン歴史博物館というものもありますが……。」
「ガロ・ローマンとはどういう意味だ？」
「古代ローマ帝国支配のフランス……。」
「あまり、ありそうにないなあ。でも念のためにそれも入れておこう。」
リヨンでの調査場所はほぼ決まった。
「ところで、その後はどうするか？」
ウッタマー師が報告する。
「こちらに着いてからMさんに電話したんですが、ショマラ氏と今のところ連絡がつかないということでした。」

ショマラ氏とは例のノストラダムス協会のリーダーで、このリヨンでわたしたちに会ってくれると言ってくれていた人だ。

「そうか。」

「わたしたちがリヨンを訪れることを決定してからMさんが毎日電話をかけてくれているのですが、ここ数日間、不在が続いているそうです。Mさんは『ショマラ氏はバカンスに出かけてしまったのではないか』と言っているのですが……。」

「そうなると、このリヨンでショマラ氏には会えないかもしれないんだな。せっかくここまで来ていて会えないのは残念だが、ここでの調査が済み次第、次の調査地へ移転するか？」

「どこをお選びになりますか？」

「モンペリエかパリの国立図書館にしようと思う。」

「もし、国立図書館にするのだとしたら、前もって入館の許可を受ける必要がありますね。」

とマンジュシュリー正悟師。

「そうだな。だれかに明日パリへと行ってもらおうか。どっちみち国立図書館へは行くことになるだろうからね。それから、全員には報告していなかったが、モンペリエのフォンブリュヌ氏とも連絡を取れずにいる。」

「フォンブリュヌ……ミッテラン大統領誕生と教皇の暗殺の解釈を適中させた人ですね。」

「そうだプンナ。彼は実はノストラダムスの詩から第三次世界大戦が昨年中に起こるとして発表していたんだが、この解釈は完全に失敗だったんだね。だから、非難を避けて姿を隠しているらしいんだよ。全く居所がわからないみたいだから、この短い三日間に彼に会うことはできないだろうね。」

「残念ですね。」

「おそらく、リヨンの調査が終わったら、パリへ行くことになると思う。パリの国立図書館の閲読許可を取っておくことにしよう。」

わたしは、人員配置を決定した。
「センターとしてホテル待機がマハー・ケイマ正大師とヤソーダラー正大師。他の人はセンターと連絡を取りながら動くこと。まず、ミラレパとヴァジラロカが小さい図書館と博物館関係を回ってくれ。」
「はいっ。」
「わたしとマンジュシュリー正悟師、ウッタマー師でノストラダムス協会と市立図書館を回ることにする。ガロ・ローマン歴史博物館もわたしたちのグループで受け持つことにしよう。あ、プンナもこっちに入ってくれ。」
「わかりました。」
「それから、通訳をしてくれることになっているMさんが明日九時三十分にリヨン駅に到着する。迎えは、そうだな、プンナとウッタマー師とで行ってくれるか。Mさんとはホテルで会おう。それまでは別行動だ。」
「では、僕はパリの方ですね？」

「そうだ、カッサパ師。ヴァジラティクシュナーとヴィマラを一緒に連れて行ってくれ。」
「はい。」
「そして、推薦状をもらった後、国立図書館へ行って必要なことを調べ、その日のうちにリヨンまで戻ってほしい。大丈夫そうか？」
「その前に閲覧許可については聞いていないので教えていただかないと――。」
「その件についてはマンジュシュリーが担当していたから、マンジュシュリーから聞いておいてくれ。ＴＧＶの時刻についてはヴァジラロカと打ち合わせをした方がいいだろう。じゃあ、打ち合わせの必要な人だけ残って、それ以外の人はもう休め。明日また早いからな。」
「はい。」

◉解脱者の本領発揮

翌十四日、予想外の問題に直面したのは、ほとんど休む間もなく、朝五時半にホテルを出発したパリの国立図書館組である。日本大使館の広報文化センターでは、時間的な問題もあって許可に必要な推薦状を一人分しか書いてくれないのだという。

しかし、さすがはオウム真理教の修行者たち。粘り続けて三人分の推薦状をもらうことに成功。十時五十分に、

「三人分の推薦状がもらえたので、これから国立図書館へと向かいます。」

という連絡がセンターに入った。

だが、その後も大変な問題に襲われた。せっかく閲覧許可に必要な条件であった推薦状を携えていったにもかかわらず、門前払いを食わされたのである。

「もう、唖然としてしまいましたよ。」

とは、国立図書館組のマハーカッサパ師の言葉だ。

一時も無駄にしてはならない——疲労を押しての調査が始まる。

図書館側が入館を許さなかった理由は、もともと博士課程以上の研究者のための図書館であるということと、閲覧することのできる資格を持った人が、既に六十人順番を待ちをしている、ということの二点であった。

わたしがセンターに電話を入れたのは、折しもこの問題についての連絡がパリから入った直後であった。しかも、わたしがロビーでMさんに会っているかもしれないということで、マハー・ケイマ正大師が指示を仰げたら仰ごうと考え、彼らに、

「十分後にもう一度電話をするように。」

と言って電話を切ったところだったのである。

わたしは、センターを通してパリの彼らに指示をすることができ、彼らも十分後には指示を受け取ることができたのだ。

こういう事象は全くの偶然なのだろうか？　わたしはそうは思わない。必ずやり遂げなければならないことがあるとき、それを助けてくれる不思議な力の働き

があるものである。間違いなく、今回の情報収集はやり遂げねばならないことなのだ。

さて、わたしが指示したのは、

「国立図書館で入館許可が取れるように粘れるだけ粘れ。」

ということであった。

普通の人間だったらいざ知らず、オウム真理教の解脱者の場合、「ああ、そうですか」といって目的を達成せずして引き下がることは許されない。意志の力、思念の力、心の強さ、智慧、そして神通力など、解脱者の持つ驚異的な力をフルに使って局面の打開を図らなければならないのだ。

よくオウム真理教の機動力、パワーなどがマスコミで話題になったり、神通力を取り上げられて超能力宗教などといわれたりしているが、こういう力はすべて修行によって身につけているのである。修行によって、真我がもともと持っている神秘力を発現させるわけだ。したがって人間ならだれでもこの大いなる自己変

革の可能性を秘めているのである。

ところで、わたしは国立図書館組に、

「どうしても駄目であったなら、蔵書目録だけでも調べさせてもらい、ノストラダムス関係でどのような本があるか押さえること。その上で向こうが紹介してくれるという図書館へ行くように。」

という指示も出しておいた。

その後の彼らは、見事に解脱者の本領を発揮、わたしの期待に応えてくれた。

まず、粘りに粘った末、『蔵書目録を調べるだけ』という条件で、特別な入館許可をもらうことができた。ただし、このときは「一人だけなら」ということだったので、フランス語のわかるヴィマラが中に入ることになったそうである。

しかし、解脱者ともなれば、この程度のことでは満足しない。またまた、

「彼だけじゃとても間に合わない。」

と言って掛け合い、とうとうヴァジラティクシュナー師もマハーカッサパ師も館

内に入り込んでしまうことに成功。しかも、中に入ってからは、閲覧許可を持っている人に頼み込み、蔵書目録をはじめとして、日本ではまだ紹介されていない四行詩・六行詩のコピーまでとってもらうことができた。ほぼ、当初の目的を達成してしまったのだ。もちろん、他の図書館へ行く必要もなかった。

あと残っている仕事があるとすれば、蔵書目録をチェックして、必要な本についてのマイクロフィルム作成をパリ国立図書館に依頼するということくらいである。

◉次々と集められた最古の予言詩集

一方、ミラレパ正悟師のグループはというと、ローヌ県立古文書館で、一五五五年発行の予言詩集『諸世紀』を発見する。

一五五五年版といったらノストラダムスの生前に出版された、しかも初版本だ。これはすごい！　わたしが一番求めていた本ということになる。

この本については写真撮影の許可が出たので、彼らは一度ホテルへ引き返し、カメラやビデオを持って再びローヌ県立古文書館へと向かった。

その後日談。帰国してからヴィマラが資料整理を始めた。すると一五五五年版と書かれた袋の中から出てきたのはなんと一五六八年版の資料。おそらく、古文書館へ行ったときに言葉の問題か何かで伝達ミスが生じたのだろう。古文書館へ問い合わせてもみてみたが、一五五五年版はなく、一五六八年版ならあるということだった。

だが、一五六八年版だったら、例のモンペリエで盗難に遭ったまま見つかっていないという予言詩集と同一のものである可能性が高い。——などと思っているうちに、後に会談することになるノストラダムス研究家のショマラ氏が著書で、「リヨンのローヌ県立古文書館に、一五六八年という日付の付けられた『諸世紀』があるが、それは実際には一五六八年後に出版されたものと思われる。」という意味のことを述べているということを知った。

ショマラ氏は後でもう一度ご紹介するが、文献学の分野からノストラダムスにアプローチしている研究者なので、信憑性は高い。残念！

さて、わたしたちのグループはというと、リヨンの市立図書館に五十一本のマイクロフィルムと五冊のノートが保管されていることを突き止めることができた。その内容は、ノストラダムスのいろいろな年代の原典とその解釈書である。ぜひとも必要な資料である。

ところが、マイクロフィルムの作成を依頼するとなると、注文してから手元に届くまでに一カ月以上かかるのだという。日本に帰り次第翻訳に入るつもりなので、とてもそんなには待てやしない。

そこで、

「マイクロフィルムも依頼するから、帰国前に写真撮影を許可してくれないか。」

と頼んでみたが、図書館側は駄目の一点張り。マイクロフィルムを作成する図書館専属の写真家しか写真撮影をできない規則であるという。

やむなくホテルへと戻ったが、あきらめきれないし、必要なことだとも思ったので、

「明日はマンジュシュリーとマハーカッサパで図書館へ行け。撮影機材を持ってね。思念すればきっと許可が出るよ。わたしはセンターを担当するから……。」

などと話しているときに、長いこと連絡のつかなかったノストラダムス研究家のショマラ氏と連絡がつき、願ってもないアドバイスを受けた。

「あの図書館の館長はもう年で、頭が固くて融通が利かない。だから館長でなくてAさんという人に頼みなさい。わたしの場合、いつもAさんに協力してもらって、うまくいっています。わたしの紹介だと言ったらよいでしょう。」

頭が固くて融通が利かない——なるほど、と思った。

◉〝ノストラダムスの遺言状〟も入手

夜、再びミーティング。

「それでは、図書館に着いたら、まずAさんに会えばいいわけですね。」
マンジュシュリー正悟師が、「これは希望が見えてきた」というような、ホッとした表情で言った。
「そうだ。そして、あとは思念によって事を運ぶ、と。あと、プンナとヴァジラロカ、ウッタマー師、Mさんにもついて行ってもらおう。うまくやってくれ。」
「はい、わかりました。これはもう超能力の世界ですね。」
この言葉には、皆顔を見合わせて笑ってしまった。しかし、それは真実だった。
「あとわたしからの報告だ。今日編集部のスッカー師から情報が入った。マハー・ケイマ、メモを読んでみてくれ。」
「はい。マルセイユのブッシュ・デュ・ローヌ県立図書館にノストラダムスの遺言状があるそうです。これは、ノストラダムスの詩の年代を解くのに有効とされているもので、保管されている場所が第二展示会場の六七五番と六七六番。コピーも可能なようです。以上です。」

「編集部も、日本で頑張って調査してくれているみたいだなあ。」
マルセイユは地中海に面したフランス第二の都市である。このリヨンからはTGVで三時間ちょっと、といったところだ。
「ノストラダムスの遺言状か――。みんなどう思うか？　手に入れておいた方がいいだろうか？」
しばらく間をおいて、全員の気持ちを代弁するかのように一人が答えた。
「せっかくフランスにまで来たのですから、できる限りの資料を入手した方がいいのではないでしょうか？　特に、これはある場所がはっきりしているのですから。」
「じゃあ、決まった。で、だれが行くか？　マハー・ケイマ、マハー・ケイマがマルセイユへ行ってみるか？　センターにも少し飽きたようだからな。」
マハー・ケイマ正大師は黙っている。が、それは承諾を表わしているのだ。まるでサキャ神賢みたいだ。仏典にはサキャ神賢が黙ったままで同意や承諾をするという場面がよく出てくる。

「それでは、ヴァジラティクシュナー師とヴィマラがマハー・ケイマ正大師と一緒に行ってくれるか。」
わたしは言った。

翌十五日、すべてが順調に進んだ。ノストラダムスの遺言状は手に入った。これはペン書きの原文をコピーしてきたものである。
市立図書館でも写真撮影が許された。だが五十一冊の本と五冊のノートともなれば大変な量である。これを一ページずつ、あるいは見開きで一枚ずつ撮るのだ。
マンジュシュリー正悟師と共に撮影を担当したマハーカッサパ師によると、二秒間に一枚のペースであったそうで、さすがに夕刻、げっそりと力尽きたような様子でホテルに戻ってきた。それからしばらくは、
「もうマハーカッサパも年だからなあ……。」
などと言っては、からかったものである。

しかし、これで日本に帰った後、すぐに翻訳作業に入れるのだ。そして、こちらの翻訳をしている間に、パリ国立図書館の蔵書の方のマイクロフィルムを作ってもらえば、時間も無駄にならないであろう。

なお、博物館関係では資料が見つからなかった。

◉本場フランスの専門家、ショマラ氏との会談

ショマラ氏との会談は、その日の午後六時、ホテルのピアノ・バーの一角で行なわれた。先にも書いたように、氏とは長いこと連絡が取れずにいたのだったが、それは彼が片道一〇〇キロという遠距離を通勤しており、夜遅くなってからでないと自宅にいなかったからであるということがわかった。

ショマラ氏は、Mさんを通じてわたしがリヨンに来ていることを知ると、快く会談に応じてくれた。

あいさつを終え、わたしたちは席に着いた。今回の取材旅行のクライマックス

ノストラダム協会のリーダー、ショマラ氏との会談。ショマラ氏は貴重な情報をもたらしてくれた。

を迎えようとしていることをわたしは感じていた。ショマラ氏はどんな新情報を提供してくれるのだろうか。否が応でも期待は高まる。

氏はわたしの予想とは違い、ごく普通のサラリーマンという感じの人であった。ノストラダムス研究の他に仕事を持っているとなれば、それも当然のことだろう。しかし、慎重に言葉を選ぶところ、確信のある事実についてのみ語り、想像を交えないところは、まさに学者としての性格であった。

氏は、まず最初に、二カ月後に発行される予定であるという自分の著書の原稿を見せた。

「今、これを差し上げるわけにはいかないが、一冊の本として完成したらお送りしましょう。あなたの研究の参考になるはずです。」

とショマラ氏。わたしはその好意にお礼を言うと、ズバリわたしが最も知りたかった質問を切り出した。

「ノストラダムスの予言によると、この世は滅亡するのでしょうか?」

話の流れも考えずにこんな質問をするのも性急すぎることかもしれなかった。が、わたしは待てなかった。昨年末に『ヨハネの黙示録』を解読した結果、ハルマゲドン（人類最終戦争）が起こることがはっきりとわかった。だが、それがいつか、ということになると、『ヨハネの黙示録』では明示されていない。

ところが、ノストラダムスの予言詩には、はっきりと時期がうたわれているものがあるのだ。例の〝一九九九年七の月……〟である。これが人類滅亡の予言だという見解が圧倒的に多い。

そうでなくても、ノストラダムスの予言は『ヨハネの黙示録』をさらに細かく区切って予言しているのだとわたしは考えているのだ。

◉あらゆる預言の原典『ヨハネの黙示録』

『ヨハネの黙示録』――これは『新約聖書』に含まれる最後の一書である。イエス・キリストの十二使徒の一人である聖ヨハネによって書かれたと伝えられる

が異説もある。

この〝黙示〟とは、原典のギリシア語では〝アポカリプス〟という言葉で言い表わされている。これは「隠された真理の開示」という意味である。この他にも「神の秘密の預言」「未来を開示し、この世の終わりの神の裁きを告知する」という意味を持っており、これだけでもノストラダムスの予言詩集『諸世紀』同様ただならぬものであることを暗示しているといえよう。

ヨハネは西暦九五年ごろ、ローマ帝国のドミティアヌス帝によってエーゲ海の孤島パトモス島に流された。そこで脱魂状態（この脱魂状態とは瞑想の究極であるサマディのことである）になり、後の彼が『ヨハネの黙示録』として書き留めた神秘的でかつ恐ろしいヴィジョンを見たのだという。

以来二十年近くもの間、この『ヨハネの黙示録』は「聖書の奥義書」「あらゆる預言の原典」「預言の中の預言」などと呼ばれてきた。

ところが、ヨハネの使っている言葉があまりにも象徴的なため、現代に至って

も難解な書とされ、研究者の間でも様々な見解が出されているというのが実情である。

そして、この『ヨハネの黙示録』には明らかに人類の滅亡の様子が描かれているのだが、「それがいつなのか」ということになると、それを推測できるような言葉を見つけることができない。また、『ヨハネの黙示録』はわたしが解読したところによると、ヨハネの時代からはるかなる未来――つまり、この宇宙が維持の時代を過ぎて破壊され、虚空へと還元されるまでという大きな時間のスケールで預言されているのである。

それに対して、ノストラダムスの予言の期間は短いのだ。すなわち、ノストラダムスの時代から、おそらくは二〇〇〇年代まで。

ということは、ノストラダムスの方がより詳しく、一つ一つの事象をとらえているのではないだろうか、という推測が成り立つのである。あのアンリ二世の痛ましい詩の予言、それに続くフランソワ二世やメアリスチュアートの運命の予言

を見てもそれは明らかである。

ここにわたしがノストラダムスの解読を急いでいる意味があるのである。もっと詳しい予言を知るべくして。

それによって、わたしはわたし自身の見ている未来ヴィジョンを確かめたいのである。というのは、形状界で見るヴィジョンには、時間のズレがどうしても生じてしまうからである。なぜなら、その形状界のデータがこの現象界に投影されて初めて現象化するのであるから。

だが、だいたいの時間、あるいは時期というものはわかる。したがって、それを他の予言者の予言と合わせて検討するならば、おのずとそれが限定されてくるのだ。

◉人類は滅亡するのか?

「ノストラダムスの予言によると、この世は滅亡するのでしょうか?」

というわたしの問いに、

「答え難い質問ですね。」

とショマラ氏は言った。

「わたしにとって、何を基礎として答えるかが問題になってきます。一五五五年版の三五三詩、一五五七年の六三九詩はわたし自身が研究の基礎としているものです。しかし、一五六六年版となると、全部偽物だとわたしは断定しています。一五六八年版には、本物・偽物を含めて十三巻があります。偽物には注意しなくてはなりません。」

「どのようにしたら偽物が見分けられるのですか?」

「偽物は政治家の名を変えて入れてあるなどしているので、見分けられるのです。」

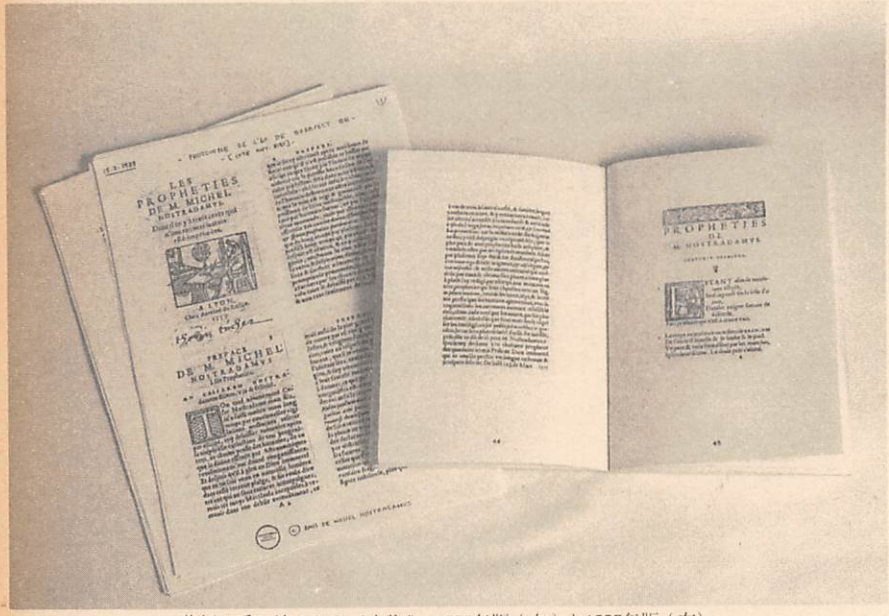
なんと、初っ端から今回の目的の核心に触れたような思いだ。わたしは日本に伝わってきたノストラダムスの詩に疑問を持ち、真実のノストラダムスの手による詩を入手すべく、はるばるとここまでやってきたのだから。

ショマラ氏は続けた。

「わたしはここに一五五五年版と一五五七年版のコピーを持ってきています。これは間違いなく本物です。あなたにこれを差し上げますから、これをもとにして研究をしてください。」

「え!?」

こんなにうまく話ができていていいのだろうか、と思うくらい簡単に〝本物〟はわたしの手に渡された。最高のプレゼントだった。ノストラダムスが自ら初めて予言詩を世に広く公表した一五五五年版、そして、同様に彼が生存中に手がけた一五五七年版。しかも文献学者としてのノストラダムス研究家ショマラ氏の〝本物〟という折り紙付きなのだ。やはり、シヴァ大神が書かれたシナリオどおりに事は進んでいるに違いない。



尊師の手に渡された〝本物〟。1555年版（右）と1557年版（左）。

◉『一九九九年七の月……』は偽物？

「今、本物と偽物ということについてショマラ氏は話されましたが、『一九九九年七の月……』という詩は本物に含まれるのでしょうか？　日本においては最も有名な詩なのですが、わたしは疑問視しているのです。」

「それは、何章の何番のものですか？」

それに対してヴィマラが答える。

「十章の七二です。

一九九九年七の月
恐怖をまき散らす大王が天から降りてきて
アングーモワの大王を蘇らせるだろう。
その前後に軍神が幸せに統治するだろう」

「ああ、それはノストラダムスの死後の版から出ている詩です。生前には出ていない。何年版が日本で紹介されているかわかりますか？」

「一六七二年版です。ガレンシアが注釈を付けヘンリー・ロバーツが編纂したものです。」

「そうだとしたら、その一六七二年版自体に間違いが多い。しかも、フランス語から日本語と訳されていく段階での解釈の間違いも加わっているでしょうね。あなたの直観は正しいんじゃないでしょうか。」

この詩は人類滅亡を予言する詩だとして、日本にノストラダムス・ブームをもたらしたものである。

一九九九年七月に、空から恐怖の大王がやってきて、人類を滅亡させてしまうのか？　恐怖の大王とは何の象徴か？　どのようにして人類は滅びゆくのだろうか？

――この詩によって、日本に十六世紀のフランスの予言者ノストラダムスの名が知れ渡り、ノストラダムスに対する関心は、以後衰えを見せていない。

それなのに、この詩はノストラダムスの生前に発表されたものではないのだという。「偽物である可能性が高い」と、ショマラ氏は言うのである。

◉オウム真理教だからできた本格的情報収集

「日本のノストラダムス・ブームの土台となるものがなかったんだ。出版社も研究家も、間違いの多い後世の出版物を頼りに、人類滅亡の危機感を煽り立てていたことになる。」

「でも、いくら日本でも、ノストラダムス研究家だったら、資料を十分に持っているのではないでしょうか?」

「いいかヤソーダラー、今回の情報収集はオウム真理教だからこそできたんだ。これだけの人材を投入し、費用をかけてというのは、研究家個人にはとてもじゃないができるものではない。一人の力には限界があるんだ。」

「確かにそうですね。」

「今回、日本のあるノストラダムス研究家が〝失われた予言詩〟などと、もっともらしく言っていたものでさえ、わたしたちは、いとも簡単に手に入れることができた。」

「あの六行詩のことですね。」

「そして、プレザージュと呼ばれる詩だ。これにはノストラダムスが自分の死を予言したものも含まれている。これがシヴァ大神に祝福された組織の力なんだ。わたしたちは、日本で未発表の資料を大量に持ち帰ることになるだろう。」

「しかし、『一九九九年七の月』という時期が尋常でないというのは、尊師の大宇宙占星学とも一致していますよね。もし仮に、ノストラダムス以外の人間がこれを書き加えたにしても、よくここまでわかりましたね。」

「占星学をやっている人間だったら、だれでもこのくらい出せるだろう。星々がグランド・クロスを組む時期であるからね。ただ、グランド・クロスが一概に最悪であるとはいえない、というのが近ごろのわたしの見解だ。」

◉一九九九年は〝きっかけ〟の年

わたしは以前、こう書いたことがある。

――一九九九年で最も危険なのは八月一日だ。これは、占星学の暦では七月に属している。したがって、ノストラダムスが言う、「一九九九年七月の……」と恐ろしいほど一致している。

この日、太陽が月と凶、火星と大凶、木星と大凶、土星と大凶、天王星と最大凶、海王星と最大凶と、凶角が集中している。こんなことは、かつてなかっただろう。

これは、それまで支配的だったもの（わたしはこれを既存の地球規模でいう社会ととらえる）が、一気に消えてしまうということではないだろうか。それは、「死」によって実現されるということが、太陽と冥王星の最大吉角によって推察される。

とりわけ恐ろしさを感じるのは、この日にたくさんの星と凶角をなしている太

陽が、定座に入っていることである。定座とは、太陽の場合は獅子座であり、もともとの位置ということである。どの星も、自分の定座に入ったときは、その影響力を最高にするのだ。

だから、太陽が定座に入っているということは、本来、他の星に比べて力の強い太陽が最大限の力を発揮するとき、ということである。そして、その最大限の力がすべて凶作用として働くというのだ。やはり、人類の滅亡という可能性が非常に高い。

そして、その原因となるものは？

火星と冥王星が吉角である。ここでハッと気づくのが、広島と長崎の原爆投下の日。あの両日とも、冥王星と火星が吉角をなしていたではないか。だとすると、核戦争の勃発が真っ先に思い浮かぶ――（『トワイライト・ゾーン』一九八七年九月号より）

しかし、その後、わたしは『ヨハネの黙示録』の解読やわたし自身の予言の力

によって、「一九九九年にはハルマゲドンが起こるだろうが、決定的な破局はもう少し後のことである」と考えるようになった。つまり、一九九九年はきっかけとなる年ではあるが、重要なことはもっと後になって起こるということである。それも、その破局は新しいタイプの人類（超人類）が誕生して平和な世界を築くに至るためには、避けて通れないものである、と肯定的な見方さえするようになったのである。

そういう観点に立って見てみると、このノストラダムスの人類滅亡に関する予言は腑に落ちないのだ。これが、この予言詩に疑問を持った理由である。

◉気がかりな二つの予言詩

「どういうわけで、あなたは人類滅亡ということに興味を持たれたのですか。」ショマラ氏が聞いた。

「実は、昨年『ヨハネの黙示録』を解読したんです。それ以前には『ヨハネの黙

示録』なんて、読んだこともなかったし、その存在すら知らなかったんですが、たまたまわたしの弟子にそういった類の預言の研究に興味を持っている者がいましてね、彼から聞いたんです。『聖書』の中にも預言が書かれているということを。そして、それを聞いた夜に、

――ヨハネの黙示録の封印を解いてしまいなさい――

という神の啓示があったんです。この神というのは、いつもわたしを導いてくださっているシヴァ大神なのですが……。そして、実際に解読作業に取りかかってみたら――本当にびっくりしましたね。すごい預言の適中率なんです。百パーセントなんですよ。その『ヨハネの黙示録』に人類の滅亡が預言されていたんです。そして、わたしはそれを解読することによって人類に残された時間がわずかしかないということを知ったのです。」

「ほう。」

「そして、ノストラダムスはその『黙示録』よりも細かい予言を残しているんで

す。ですから、当然それに関する予言詩があるのではないかと考えられるので、ノストラダムスの予言詩も解読してみたくなったのです。」

「もっと詳しく知りたいと思われたわけですね。で、それに関する予言詩は見つかりましたか?」

「はい、今のところ気になる詩が二つあります。一つはこれです。」

【第四章三十二】

真夜中、高い山の上に月
ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人がそれを見た
弟子を通じて不死になることを訓戒する
目は南に、手は内奥、体は火に

(オウム真理教翻訳チーム訳)

第4章31

La lune au plain de nuit ſus le haut mont,
Le nouueau ſophe d'vn ſeul cerueau la veu:
Par ſes diſciples eſtre immortel ſemond
Yeux au mydi. En ſeins mains, corps au feu.

（1555年版）

真夜中、高い山の上に月
ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人がそれを見た
弟子を通じて不死になることを訓戒する
目は南に、手は内奥、体は炎に

（オウム真理教翻訳チーム訳）

「その解釈はだいたい合っていると思います。ところで、あなたのおっしゃっている〝破滅〟とは、精神的な破滅を指しているのですか？　それとも物理的な破滅を指しているのですか？」

「物理的な破滅のことです。ショマラさんはどうお考えになりますか？　破滅はあると思われますか？」

「そうですね。わたしは透視によって未来を知った人間の考え方が変わるのではないか、と思っているのです。それによって何とかなる――救われるのではないか、と。」

学者肌のショマラさんがこういう言い方をされたのは少々意外だったが、だれでも追いつめられた事態に対しては楽観的に見たがるものである。少しでも安心を得ようと。

だが、わたしの予想だと、救われるのはごく一部の人間だけなのだ。

この詩に対するわたしの解釈を付け加えておくことにしよう。

ノストラダムスは他の予言の中で、〝月の統治〟という言葉を使って、キリスト教を背景とした社会を言い表わしている。したがって、この場合の月も、キリスト教が世界に浸透している様子をいっていると見てよいだろう。

そして〝ただ一つの頭脳を持つ新しい賢人がそれを見た〟のである。〝ただ一つの頭脳〟というからには、この世ではその人物しか持ち合わせていない頭脳ということになる。それを持っている新しい賢人がいるのだ。賢人とは、知性と智慧を備えた聖者と表現してもよいだろう。

彼は弟子を通じて不死になることを訓戒する。つまり、この賢人は弟子を通じて不死へ至る道、解脱を説くというのだ。

「これは、わたしのことを指しているのではないだろうか？」

わたしはそう感じた。こんなにも一致している。しかも、次の〝目は南に〟というのは、南にあるといわれているシャンバラという理想郷を目指していると受け取ることができる。

次の〝手は内奥〟。これは相手の心の内側を操作するシャクティーパットだ。シャクティーパットとは、わたしが行なっていた霊的エネルギー移入のイニシエーションで、これによって神通力や精神性の向上のもととなるクンダリニーは上昇し、〝体は炎〟となるのである。加えて、シャクティーパットは初期のころは山の上を選んで行なわれたものである。

やはり、ここはわたしのことを予言していたものと受け取りたい。が、そうなると、その決め手となる時代はこの予言詩からはじき出せるのだろうか？

ふと、わたしにインスピレーションがわいた。

「この詩の番号は四章の三十一。これを四百三十一年と見て、四百三十一年後の出来事としたなら――。この予言詩集が出版された一五五五年から四百三十一年後――やはりそうだったか！」

四百三十一年後といったら一九八六年ということになる。この年は紛れもなく、わたしが宗教活動とシャクティーパットを始めた年ではないか！　わたしは、こ

秘儀、シャクティーパット。これによって、クンダリニーが上昇し、"体は炎"となる。

の詩が自分のことを予言したものなのだという確信を持った。

◉戦慄の未来が浮かび上がる

「麻原さんの言われるもう一つの詩とはどれですか？」

「はい、一章の九十一、この詩です。」

【第一章九十一】

神々が人類に姿を現わす
彼は大きな戦争の首謀者となる
神の前に静まり返って見える軍事と攻撃
左手に向かってもっと大きな衝突を起こす

（オウム真理教翻訳チーム訳）

第1章91

Les dieux feront aux humains apparence,
Ce quils feront auteurs de grand conflit:
Auant ciel veu ſerain eſpée & lance,
Que vers main gauche ſera plus grand afflit

（1555年版）

神々が人類に姿を現わす
彼は大きな戦争の首謀者となる
神の前に静まり返って見える軍事と攻撃
左手に向かってもっと大きな衝突を起こす

（オウム真理教翻訳チーム訳）

「うーん、これはちょっとおかしいんじゃないかな？　神々が姿を現わすというのは言い過ぎじゃないですかね。わたしが訳すとするならば逆ですね。〝人類が神に向かっていく〟とします。」
「それはどういう意味ですか？」
「信仰が高まって、人間の力が神々に近くなっていくということなんです。」
「あ、そうですか。ショマラさん、実はわたしが〝神々が人類の前に姿を現わす〟という取り方をしたのは、『ヨハネの黙示録』に記された預言を背景としているんです。『ヨハネの黙示録』によると、神が人類に破局に至る戦争を起こさせるんですよ。」
「ああ、なるほど。そういう見方もあるかな？」
ショマラ氏は言った。しかし、後になってもう一度考えてみたとき、ショマラ氏の解釈も『黙示録』と一致していることに気づいたのである。
『黙示録』では、神が人類の積み重ねた悪業を清算させるために、ハルマゲド

ンとその後に続く戦いを起こす。そういう意味では、神々が人類に姿を現わす。

彼は大きな戦争の首謀者となる。

といってよい。こちらがわたしの解釈だ。

同じく『黙示録』では、ハルマゲドン後の戦いにおいて、信仰心厚く、神々のような超能力を得た超人類が、神の意思によって、悪業を積み重ねた人類を滅ぼすべく戦うと預言している。これはショマラ氏の言う、

人類の信仰が高まって神々に近い力（超人類）となっていく

彼らは大きな戦争の首謀者となる

と一致するのである。

いずれにせよ、ノストラダムスも、神または神の意を受けた超人類が、人類を滅亡させる大きな戦いを仕掛けていくと予言したと見て間違いないであろう。

早くも『ヨハネの黙示録』が予言している未来と同じ未来がはっきりと浮かび

上がってきたようである。今後も、一五五五年版と一五五七年版を完全に解釈してしまうことによって、よりリアルに、より劇的に人類の運命が描き出されることだろう。

◉抜群の適中率——瞑想による近未来予言

ショマラ氏は付け加えた

「予言詩の解釈には注意が必要です。事件が起こった後に予言詩と結び付けるのは問題ないのですが、未来の出来事に関して解釈を公表することには気を付けなければなりません。未来に関する予言詩の解釈が外れてしまったという例もありますから。」

と、ショマラ氏は例のフォンブリュヌ氏の失敗を例に挙げた。ヨーロッパでは、特に研究者の間ではショッキングな出来事だったのだろう。

しかし、そのショマラ氏の言葉に対してわたしはこう説明した。

「いえ、ショマラさん。わたしは思考によって予言詩を解釈するのではなく、瞑想によって解釈をするのです。ですから、解釈が当たる当たらないの問題ではなく、正しい解釈しか存在しないのです。わたし自身、一九八七年から九三年くらいまでの予言を発表していますが、これも瞑想によって見た未来ヴィジョンがもとになっているのです。今年はもう八九年ですから、既に現実化した予言もだいぶあります。」

「どういう予言をされるのですか？」

「そうですね、気象や火山の噴火、世界情勢、日本の国家体制の変化などです。」

マハー・ケイマ正大師が、

「尊師の予言がどれだけ適中しているかという『マハーヤーナ』の特集記事を持ってきています。」

と言って『マハーヤーナ』を開いてMさんに手渡した。『マハーヤーナ』とはオウム真理教の会員誌である。

●三原山噴火

「今年の終わりごろに、三原山が爆発するぞ。」

一九八六年三月、本栖湖での修行中におっしゃった、麻原尊師の言葉は現実化した。予言適中である。

八六年十一月十五日、三原山は噴火した。地球創世を思わせるマグマの壮観に、観光客は集い酔いしれた。だが、人間の愚かさをあざ笑うかのように、十一月二十一日三原山は大噴火を起こし、島民は避難を余儀なくされたのだ。そうした光景は、いまだわたしたちの記憶に新しいところである。

「三原山は再噴火するよ。」

翌八七年十一月十六日、やはり尊師のお言葉どおり三原山は再噴火した。幸いにも、この再噴火が島民に及ぼす被害は少なく、わたしたちは胸をなで下ろしたものだが、尊師の予言の正確さには、戦慄を覚えざるを得なかった。

●干ばつ

麻原尊師の予言は、続々と適中した。わたしたちはその度に驚き、尊師への「信」を強めていくのだった。

すぐ現実化した予言の一つに、八七年夏の干ばつについての予言がある。これは、八七年四月から五月にかけての、秩父で行なわれた「短期集中セミナー」の際に、尊師が語られたものである。

「今年は、干ばつがあるよ。」

その言葉どおり、八七年の夏は、気象庁が〝梅雨入り宣言〟をしても、一向に雨が降らないという事態になったのだ。

さらに、尊師はこう続けられた。

「しばらくの間〝火の星〟の配置が悪い。暑さに気をつけなくてはね。」

これも適中した。八七年七月下旬、関東地方では日射病・熱射病で倒れる人が続出したのだ。……（中略）……

●地震、集中豪雨……

――本期間（七月十日から八月九日）中、土星は最悪です。……地震、大災害、集中豪雨……という可能性が高いでしょう――

大宇宙占星学による予言はこうであった。しかも、地震の起こった期間は、要注意日として挙げてあった日にちとほぼ一致しているのだ。

少し話はそれるかもしれないが、ここでいっている集中豪雨についてもズバリ適中した。七月二十日、二十一日の広島、島根での集中豪雨は、死者行方不明十五人という被害を出した。千葉でも、大雨のため、各地で浸水。八月一日の新聞では、中国の浙江省でも集中豪雨があり、三百二十余りの村落が濁流に洗われ、死者行方不明四百人以上という、多くの犠牲者を出した。信じられないほどの自然災害である。

特に、集中豪雨については、この月だけに予言した事項である。これがピタリと当たってしまったのだ。同じ土星の象意でも、大宇宙のエネルギーの流れ

によって微妙に変化する。これは大宇宙占星学を操る上での四つの条件のうち、大宇宙のエネルギーの流れを読み、インスピレーションを的確に活用している好例であろう。

――微弱な地震があるかもしれません――

九月十日から十月九日にかけての予言である。実際には土星は八月末から凶に入っていたので、このころから調べてみると、思ったとおり多くの微弱な地震が各地で頻発していた。新聞誌上に発表されただけでも、この短い期間に十四件余りの地震が起こっている。

●水難事故

七月後半から八月にかけては、水の事故が相次いだ。大宇宙占星学でも、

――海での事故・惨事が起こる可能性があります（海王星の凶）――

と、予言していた。

事実、八月六日の多くの死傷者を出したインドの客船転覆事故をはじめ、七月二十一日の中国で二百五十人を乗せた渡し船が沈んだ事故、その他、四件以上の事故がこの短い期間に起こっているのである。

中でも日本で大きく取り上げられたのは、七月二十三日、海上自衛隊潜水艦「なだしお」と大型釣り船が衝突するというショッキングな事故である。死者三十人が出た。当初、〝回避が間に合わなかった〟という海上自衛隊側の見解が発表されたが、その後潜水艦の過失の疑いが濃厚になった。これは、海王星だけでなく、

――ミスが目立つようになるでしょう――

という水星の凶によって説明される。

九月十五日、台風十八号房総半島沖へ。

九月十五日、アメリカ、ハリケーンに襲われる。

九月十八日、メキシコ、ハリケーン猛威。

また、バングラデシュでは、今世紀最大の洪水に襲われ、国土の七割が水浸し、被災者は三千七百万人、七万人の災厄に見舞われた。

このように、九月は水による災害の月であった。言うまでもなく、水を司る海王星の凶と、天災の土星の凶の影響である。

●ペルシャ湾情勢

最後に、国際関係に目を通してみよう。

――四月中旬には、イラン・イラク戦争が激しさを増すかもしれません。このとき、アメリカが強く干渉したら、それを回避できそうです――

と、『マハーヤーナ』NO9では、このように予言した。案の定、それは起こった。四月十九日「朝日新聞」の一面トップ記事に、

「『米・イランが交戦』ペルシャ湾、米石油基地攻撃」

と載っていた。また、四月二十五日の見出し記事には、

「イラン・イラク戦争　大国管理の色彩強まる」

とある。つまり、アメリカの武力を持った強い干渉により、イラン・イラク戦争は沈静化されたものといえる。これで、アメリカの干渉が成功したことがわかるだろう。

七月三日には、あの全世界に衝撃を与えた「イラン機撃墜事件」が勃発した。ペルシャ湾で、イラン航空のエアバスがアメリカ海軍イージス鑑の発射したミサイルによって撃墜されたのである。

この事件は戦争を司る火星の凶だけでなく、様々な惑星の象意によって予知されていた。

――この時期、戦争の危険性が高まります。ペルシャ湾岸の争いが再び激しくなってくるのではないでしょうか。土星の干渉によって戦争の被害は今まで以上に大きくなるでしょう。また、天王星の干渉で、この戦争において新兵器が使われる可能性があります――

このフレーズは、「イラン機撃墜事件」のために書かれたかに思われるほど、当事件を的確に象徴している。天王星の凶により、「新兵器」である、イージス鑑が使用されていること、海王星の凶から「ペルシャ湾」で事件が起きたこと。また、土星の持つもう一つの凶の意味の影響として、アメリカが「道を外れて」事件を引き起こしたことなどである。

太陽の象意のところでは、こういう予言もされている。

――名誉や成功が損なわれやすいでしょう。「イ・イ戦争」に対するアメリカの干渉が、六月十七日までは肯定されるでしょう。しかし、その後は徐々に非難の矢面に立ちそうです――

この記述は、当事件におけるアメリカの立場にそのまま当てはまる。アメリカは、エアバスを戦闘機と誤認したというのだが、民間人二百九十八人を殺したことになるのだから、国際的に非難されるのはやむを得ないことであろう。

このように、一つの事件でも、細かく分析していくと、様々な局面から大宇

宙占星学の恐るべき適中率を見ることができるのである。

他にも、「アフガンのゲリラ虐殺」「インド爆弾テロ」「ハイチのクーデター」「ビルマの暴動」など、太陽の凶と冥王星の吉が絡んだ事件も、ことごとく適中している。（以上『マハーヤーナ』NO16より）

Mさんが記事を読みながらフランス語に訳して、ショマラ氏に伝える。ショマラ氏は、わたしのまた一つ違った一面を知り、大変びっくりしたようだった。特に大宇宙占星学で一カ月前に予言したことが、一カ月後に適中している（もちろんこれは翌月の予言ということで月刊誌に掲載したので、こういう結果になっているのである）との事実には興味を持つとともに納得もしたらしい。

わたしは、こういう予言ではたいてい自分がアストラル世界へ飛んで見た未来ヴィジョンをもとに大宇宙占星学を用いて時期を限定したり、あるいは、大宇宙占星学で出た予想にインスピレーションを交えて決定したりという操作をしてい

るのである。そして、ノストラダムスもこの方法を採ったものとわたしは確信している。

しかし、ノストラダムスの時代に比べてわたしは恵まれているな、と思うところがある。それは、現代は占星学のもととなる星の運行をコンピュータによって高速解析できるということである。しかも、そのときにわたしが経験上得た〝変数〟をかけ合わせることによって、より正確な未来が浮かび上がってくるのだ。なお、この変数は現在オウム真理教の秘伝としてごく一部の人間にしか知らされていない。

◉もう一人の予言者

「あなたがノストラダムスの予言を研究するのも予言のためなのですか？　一九九九年の――？」

「いや、どちらかというと、わたしの予言を客観的に証明する一つの手段として

なんです。アストラル世界で見る未来ヴィジョンには多少時間等のズレが出るものです。だから、他の予言者の予言と合わせることによって共通部分を採ってゆきたいと思っているのです。ヨハネとノストラダムスですね、今のところは。そして、もう一人予言を解明してみたい人物がいますが。」

「その三人目の予言者とは、だれなのですか？」

「チベット仏教・ニンマ派（古派）の創始者であるパドマサンバヴァという人なんです。彼は八世紀にチベットに入ったインド密教の修行者なのですが、今日の飛行機の出現、ダライ・ラマ十四世の亡命などまで予言していたんです。ただこういう内容の一部をチベット仏教のラマなどから伝え聞いただけなので、わたしはまだパドマサンバヴァの予言詩の全貌を知らないんです。そして、念のために付け加えるなら、わたしは一九九九年に人類が滅亡するとは考えてはいません。滅亡の危機に瀕するような状態には追い込まれるでしょうが、その中から新しい人類が誕生する——言い換えれば新しい人類が誕生するための破局なのだと考え

ているのです。」

◉仏・ノストラダムス協会もバックアップ

「そうですか。それではあなたの予言の確定のためにわたしも資料の面でできるだけ協力しましょう。」

ショマラ氏は協力を申し出てくれた。

「ありがとうございます。ショマラさんのお蔭で、あなたが本物だと折り紙を付けた一五五五年版と、一五五七年版は手に入りました。しかし、生前に書かれたものは他にもまだあるでしょうし、どのように本物を見いだしたらよいかということになると……。」

「研究家は、どうしても自分の色が出てしまいますからね。この問題を解決するためには、あなた自身が十六世紀のフランス語についての辞書を使って研究されたらよいでしょう。サロンでノストラダムス協会の会議が開かれたときにも、十

六世紀のフランス語研究家の間で、言葉の解釈が問題になったものです。」

「十六世紀のフランス語……。」

日本でいえば古語辞典のようなものだろう。時代とともに言葉というものが変遷しているとなれば、ノストラダムスの時代のフランス語を理解しなくては、本当の解釈は成り立たないであろう。盲点といえば盲点であった。

「その他のことではどうですか？　質問事項を言ってくれれば、正確に調べて日本へ手紙を出しますよ。」

「本当にご好意に感謝します。そうですね。ノストラダムスの予言詩は時代が読みづらいでしょう？　それがいつ起こるのかわからない、と。わたしは詩の中に時代を解くカギが隠されていると思っているのですが、その見つけ方となるとまだ……。」

「詩の中に時代を解くカギが隠されている、という考え方にはわたしも賛成です。しかし、わたしの研究の中心は文献学なので、その点は残念ながら専門外なんで

す。」

「そうですか。」

「しかし、研究の面では協力し合ってゆきましょう。アプローチには時間がかかるものです。ノストラダムス協会とあなたとのこれからの交流を望みます。」

こうして、ショマラ氏との会談は和やかなうちにも、大いなる収穫を得て終わった。途中でオウム真理教・大宇宙占星学チームのリーダーもしているマンジュシュリー正悟師が、市立図書館の蔵書の撮影から帰ったので、例の「一九九九年」の詩のことを伝えた。

「そうだったんですか？　グランド・クロスは別に悪い意味ばかりではないですからね。それにしても、日本のノストラダムス研究家は何をもとに研究しているんでしょうかねぇ。」

「今回収集した資料を研究して発表したら、日本人のノストラダムスに対する認識は、完全に覆されることとなろう。センセーショナルなことだよ。しかも、わ

たしが気になっていたあの二編は生前の版にあるということだ。やはり、わたしのインスピレーションは正しかったということだ。」

「やはり尊師ならではのお力ですね。」

その夜のミーティングは簡単に済んだ。明日の早朝、ＴＧＶでパリへ戻ることになる。パリでは国立図書館にマイクロフィルムの依頼をしなくてはならない。

「明日までに蔵書目録を日本語に訳しておいてほしいな。それから、マイクロフィルムに収めてもらう文献をピックアップしよう。じゃあ、ヴィマラともう一人これを受け持ってくれ。」

「わたしがやりましょうか？」

「ヴァジラロカか。大変だろうけど頼むよ。」

「はい。」

「マハーカッサパ師とマンジュシュリー正悟師、ヴィマラとウッタマー師は、他

の図書館を当たってくれ。神秘図書館とサント・ジェヌ・ヴィエーヴ図書館だ。」

◉残された問題

翌日、パリに着くと、そのままホテルへと向かった。ここでもまず、センターを設け、連絡先をはっきりさせておかなくてはならないからだ。

途中、タクシーの中から奇妙な光景を目撃した。有名な凱旋門の近くである。開店前のお店の前で、若い日本人女性が三十人くらい行列して待っているのだ。

「あれは何のお店だ？」

「ルイ・ヴィトンですね。十時くらいから開くんじゃないでしょうか？」

同乗のヴァジラロカが言う。だとしたら、開店までにまだ三十分以上ある。

「どうして、そんなに人気があるんですか？」

ヤソーダラー正大師が不思議がる。

「もともとは、職人が一つ一つ手づくりするバッグなので、何代にもわたって使え

る高級で丈夫なものとして人気があったんです。しかし、日本人の場合は、ブランド指向から買いあさるんですね。店員の方も日本人をバカにして横柄な態度で接するという話です。」

「情けないなあ。そんなもの買わなければいいのに。それにしてもヴァジラロカは詳しいね。」

「ＯＬ経験者にとって、ブランドは避けて通れない問題ですからね。」

彼女は苦笑した。彼女もまた、この現世に苦を感じ、絶対的な幸福を求めて出家修行者としての道を選んだ一人だったのだ。

後で聞いたところによるとルイ・ヴィトンのお店では、一回に二、三人ずつしか店内に入れないので、開店後も何時間も外で待つのだそうだ。この寒さの厳しい二月のパリで。

「あの女の子たちは、これだけ世の中が切迫してきているということを感じ取っていないんだろうなあ。わたしたちに残されている時間が少ないというのに、刻

一刻とハルマゲドンが勃発するであろう世紀末が近付きつつあるというのに。そして、そのときほとんどの人類は死の恐怖と苦しみを味わうだろうに。」

わたしはため息をついた。

ホテルにチェックインするやいなや、皆慌ただしくパリの街へと散っていった。あと一日しかない。明日の昼には、空港へと向かって出発していることだろう。疲労がたまっているだろうに、皆頑張ってくれている。これが修行で培った精神力であるといえようか。

しかし、この十七日が終わった時点で、一つ大きな問題が残ってしまった。翻訳に当たってどうしても必要な〝十六世紀のフランス語に関する辞書〟というのが手に入らなかったのだ。

発行社を訪ねても売り切れ。九月までは次の出版をしないという。国立図書館にはあったことはあったのだが、マイクロフィルムを依頼すると七巻もある辞書であるから、日本のお金にして三十万円はかかってしまう。また、もしマイクロ

フィルムでいいということにしても、これは研究用ではなく、辞書として使うものなのだ。辞書として使うのであれば、マイクロフィルムからコピーを取り、再び本の形にしなければならない。これまた大変な作業である。

やむなく、古本屋、大きな本屋と探し続けたのであるが、とうとう見つけることができなかった。明日出発ギリギリまで本屋を回ることはできるが、おそらく無理であろう。これだけ探してもないのであるから——。

さて、どうしたものか?

考えぬいた末、他の図書館を当たって、コピーを取ることに決めた。国立図書館の方は、中へ入る正式な許可を受けておらず、マイクロフィルムを依頼するしか手がないからだ。この作業は、ボン支部のヴァジラティクシュナー師にフランスに残ってやってもらうことにした。

何といっても、ショマラ氏はわたしに一番重要なことだけを伝えてくれた。

「一五五五年版と一五五七年版は本物であるから、これをもとに研究しなさい。」

と。そして、彼がこれらを本物と断定した背景には、長年にわたる文献学の背景があるのだ。

また、

「その他の資料の中から本物を見つけ出すには、十六世紀のフランス語の辞書を使って、自分で研究するのがよいだろう。研究家の見解には、それぞれの色が出てしまうから――。」

とも。わたしのこれからの研究は、決してこの路線を踏み外すことはないであろう。これが基本であり、これを無視してしまったら、いかなる解釈も砂上の楼閣となってしまうのだ。ノストラダムスの予言詩を解読するからには、完全な形で世に出そう。

第三章　ついに解かれた封印

◉早速始まった資料の翻訳・検討作業

わたしは、オウム真理教翻訳チームと共にフランスから持ち帰った膨大な資料の翻訳・検討に入った。その結果、今まで日本にあったヘンリー・ロバーツの本と、一五五五年版、一五五七年版と対比させるだけでも、一詩につき十カ所くらいも表記の相違が見られたのである。たとえ、十六世紀の表記を現代的に変更するというのであっても、それは詩の解釈の上にはマイナスであるとわたしは考える。なぜなら、ノストラダムスがその一つの単語にどんな秘密を隠しているのかわからないからである。

翻訳チームはわたしたちがフランスでの情報収集を終えて帰国して以来、予言詩集『諸世紀』の翻訳にかかりきりになって頑張り続けてくれていた。

その翻訳の方法は、単語一つ一つにつき、古語を含めた考え得る限りの意味、用法を列挙した上で、いくつもの訳例を書くというもの。むろん、これだと大変な時間と労力を要するのであるが、あえてわたしがこのやり方を指示したのには

理由があった。

それは、訳者の観念を徹底的に排除し、ノストラダムスの意図するところをわたしのインスピレーションによって解明していくことを可能とするためなのである。

そして、この選択が正しかったということは、解読を始めてすぐさま、その場に居合わせただれもが悟るところとなった。というのも、それほどノストラダムスの詩は、わたしの最終解脱者としてのインスピレーションを抜きにしては語れないほど難解であったからである。

しかし、予言詩を難解にしたのは、他でもないノストラダムス自身なのだ。予言詩の抹殺を防ぐために——。そして、その一方で後世の人間がそれを解読し、何らかのアクションを起こすことを望んでいたのである。そこにノストラダムスの存在した意義があるのだ。

くしくも、帰国後のわたしが最初にとりかかった予言詩、『諸世紀』第一章四

十八にそのことに関する予言が隠されていたのである。

【第一章四十八】
二十年間の月の統治の後
七千年間、別の者が王国を支配する
太陽が月のうんざりした日々の責任を引き受けるとき
わたしの予言は成就し（わたしの詩は）それ以降なくなる
（オウム真理教翻訳チーム訳）

◉慎重に進められる解釈

その日、わたしは三人の正悟師、正大師とオウム真理教翻訳チームとともにノストラダムスの解読を開始した。オウム真理教には、出家修行者によって組織されている翻訳チームがあって、経典等の正確な翻訳を心がけて活動しているので

ある。現在、原始仏典のためのパーリ語、英訳されたチベット経典の翻訳、オウム真理教の出版物の英訳のための英語、東洋医学や仏典の研究などのための中国語の三チームに加えて、ノストラダムス解読のためだけにフランス語翻訳チームが存在しているのだ。今回は、フランスに同行したウッタマー師とヴィマラ、ヴァジラロカが協力してくれた。

ノストラダムスは象徴としての星々の名を使っているが、まず最初に星の名によって何を表現しようとしていたのかと探ってみた。

その手掛かりとなったものは、中世フランスにおける錬金術の辞書である。ノストラダムスも錬金術を学び、その知識を持っていたと伝えられているからだ。彼の使う星々のイメージが、中世フランスの錬金術から来ている可能性が非常に高いようにわたしには思えた。

わたし「じゃあ、ケイマが訳を読んでくれ。」
マハー・ケイマ正大師（以下K）「はい。
　月の支配の二十年が過ぎ
　他の者が（さらに）七千年君主政治するだろう
　太陽が疲れた彼の日々を握るとき
　そのときわたしの予言は実現し、そして脅かす（または皆殺しにする）」
わたし「うん。他の訳は。」
K「七千年過ぎると月の支配の二十年は
　他の人が君主政治を握るだろう
　太陽が疲れた彼の日々を握るとき
　そのときわたしの予言は実現するだろう」
わたし「全部で訳はいくつあるんだ？」
K「四つあります。」

わたし「じゃあ、四つとも聞いてからにしよう。」
K「三つ目いきます。」
わたし「うん。」
K「二十年の月の統治の後
七千年間別の者が王国を支配する
太陽がその（月の・太陽の）うんざりした（弱った・衰弱した）日々（光）の責任を引き受けるとき
わたしの予言は成就し、損なわれる」
K「最後の訳いきます。
二十年間の月の統治の後
七千年間、別の者が王国を支配する
太陽がその疲れた生涯を終えるとき
わたしの予言は成就し、損なわれる」

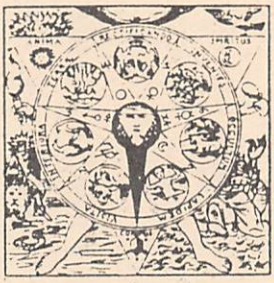
第1章48

Vingt ans du regne de la lune paſsés
Sept mil ans autre tiendra ſa monarchie:
Quand le ſoleil prendra ſes iours laſſés
Lors accomplir & mine ma prophetie.

（1555年版）

二十年間の月の統治の後
七千年間、別の者が王国を支配する
太陽が月のうんざりした日々の責任を引き受けるとき
わたしの予言は成就し（わたしの詩は）それ以降なくなる

（オウム真理教翻訳チーム訳）



わたし「うむ。」
K「単語の意味を言いますと、まずこの月というのは、太陰月・衛星・三日月型・丸顔・尻・むら気・月光という意味があります。」
わたし「あのね、この月というのはそういうことでなくて現世利益を表わしているんだよ。さっき前もって調べた錬金術での月の意味合いの中に豊饒とかいうのがあったよね。それを表わしているんだよ。もう一度そのところを読んでみてくるか？」
マンジュシュリー正悟師（以下M）「〝偶像崇拝時代にあがめられた女神はすべて月に還元されるという説もある。それらの女神とはケレス（豊饒の女神）、ディアナ（狩猟の女神）、ヴィーナス（愛と美の女神）、ルキナ（出産の女神）、ウラニア（天文学の女神）、シュリア・デア（豊饒の女神）、キュベレ（豊饒・多産の大地の女神）――〟」
わたし「もういいよ、十分だろう。豊饒とか多産とかね、これらは明らかに現世

的な個人的なものだよね。そして、月は太陽からエネルギーを受けて反射している光でもある。つまり、本質的には月が象徴するその人たちには力がないということだ。そして、月は柔順な、という言い方もできるよね。この柔順なというのはどういうことかというと、要するに隷属的な社会ということだな。その隷属的な社会というのは、知性が低下している社会といってもいいかもしれないけれども、支配者がいて、被支配者がいて、という社会だよ。――そのような社会の二十年が過ぎ、ということだよね。これについてどう思うか？」

M「もっともらしいですね。」

わたし「らしい？　らしいというのは疑問の余地があるということかな？　例えばね、キリスト教だってイエス・キリストに力があったわけじゃないよね？　あれは天なる父が力を貸す貸さないという、要するにバクティー・ヨーガだよね。あれも反射でしょう、天からの。実はわたしはこの月の社会というのはキリスト教社会を表わしていると思っているんだけど。」

M「あの、月というのは変化しやすいですよね。満ちたり欠けたりとか。その要素が尊師の説明に入っていないような気がするんですが……。必要ないのでしょうか？」

わたし「まず月というものを、どのようにとらえるかだね。」

M「やっぱり反射光という感じですよね。」

わたし「うん。だから、満ちたり欠けたりというのは、あまりここでは意味がないんじゃないかな。月の本質的な部分が重要だという気がするね。ヤソーダラーはどう思うか？」

ヤソーダラー正大師（以下Y）「わたしも本質的には力がない、隷属的という、太陽に対する月のイメージでもっていった方がいいのではないかと思います。」

わたし「そうだね。それから、もう一つ考えられるのは、宗教のあり方だ。つまり、たいていの宗教は国家権力に対する隷属的なものというふうにも考えられるよね。国の力というものを根本にして宗教が成り立っていると。ヤソーダラーが

言っていたように隷属的な宗教というか、そういう意味合いでの月――すごく深い意味のある言葉なんじゃないかと思うね。マンジュシュリーはどう思うか？」

M「いやあ、実に面白いですね。」

わたし「面白いでしょう。」

M「はい。」

わたし「だから、そのものには力がないと。要するに気休めだな。」

◉最終解脱者のインスピレーションを頼りに

わたし「もう一度訳を読んでみてくれる？」

K「〝……（略）……二十年間の月の統治の後／七千年間、別の者が王国を支配する／太陽がその、または月の、または太陽のうんざりした――〟」

わたし「ちょっと待った。翻訳チームに質問がある。この三行目の意味合いだけど、これは太陽か月に断定できるのかということ。ここに太陽と来るか月と来る

かで全然違うと思うんだよ。どうだ？　それぞれ意見を出してくれないかな。問題はここで太陽と月のどちらに訳してしまっても構わないか、ということだ。」

ヴィマラ（以下V）「ええ、どちらでもいいと僕は思います。」

ウッタマー師（以下U）「そうですね。（どちらにも）とれますね。」

わたし「とれるよね。とれるとしたら、これは間違いなく月だね。なぜ月かというと、月の宗教というものが二千年間あって、その間は人々の心が癒されることがなかったと。で、それに対して、太陽が登場するわけだ。つまり、月と太陽は相対的に登場しているわけだから、この三行目のところが太陽であってはおかしいわけだよね。」

Y「そうですね。弱ったとか衰弱したという言葉もあるし――月の方でしょうね。」

わたし「現に、今のこの時代というのはね、宗教離れをしているよね、完全に。つまり、人々が宗教では癒されないということがはっきりしてきているわけだ。だから、当然これは月でなければならないよね。」

Y「その方が合いますね。」
わたし「そうすると、正しい訳はどうなってくるかな？」
K「〝太陽が月のうんざりした、または弱った、または衰弱した日々（光）の責任を受けるとき〟」
わたし「それは〝太陽が月の……うんざりした〟だね、それは。」
K「〝太陽が月のうんざりした日々の、または光の責任を受けるとき〟……ここは光と日々しかないですね。」
わたし「それはどちらでもOKだ。同じことをいっているから。」
V「ただ、この日々と光は複数形になっていますが。」
わたし「光も複数形か？　ということは日々と訳しておいた方がいいな。」
K「最後の一行読みます。〝わたしの予言は成就し、損なわれる〟」
わたし「語の感覚としてね、〝予言が成就し、損なわれる〟というのはおかしいよね。一つ付け加えなきゃならないよ、それは。〝――予言が成就し、わたしの

詩が損なわれる〟ということだと思うよ。〝わたしの詩が損なわれる〟と言い換えれば、予言が成就したときに、わたしの詩が欠落する、と。そういうことだと思うね。」

M「あるものは成就し、あるものは損なわれるということですか？」

わたし「そうじゃない。成就したらそこでストップなんだ。そして、その後はゴソッと落ちてしまう、意味をなさなくなるということなんだ。」

Y「それ以降の詩が――ノストラダムスのそれ以降の詩が損なわれちゃうということなんですね。」

わたし「そうです。それは一章の四十八以降の詩をいうんじゃなくて、年代的にね、それ以降の詩は意味をなさなくなるということだ。――で、今度はその年代がいつなのかを探ってみなくてはね。」

◉予言詩でも明言――運命は変えられる！

このようにして、今回のノストラダムスの予言詩の解釈は入念に進められていった。

それにしても、〝わたしの予言は成就し、（わたしの詩は）それ以降なくなる〟というのは面白いではないか？

わたし「どうして〝わたしの予言は成就し、わたしの詩はそれ以降なくなる〟のかわかるか？　これはつまり、未来の運命が変化してしまうということをいっているんだよね。ノストラダムスが十六世紀に詩によって予言していたことがなくなってしまうということなんだから……。ケイマはどうだ？　どうしてだかわかるか？」

K「カルマ（なした行為によって蓄積される善業や悪業のこと。これによって、運命が決定づけられている）が変わってしまうということなんじゃないですか？」

わたし「そうなんだ。この月に対する太陽は本物の光ということだよね。光は非形状界のデータを変え、カルマを変えることができる。したがって未来を変えることができるということだ。」

第一章で述べたように、この宇宙は非形状界、形状界、現象界という三つの世界から構成されている。このうちの非形状界がすべてのもととなっているデータが光として存在する世界であり、このデータが形状界、現象界と順次投影されていくことによってわたしたちの生きている現象界ができあがっているのである。

例えば、スライド映写機をイメージしてみてほしい。スライドの画像がスクリーンに投影されて新たなる画像が作り出されるのと同じように、非形状界のデータは形状界へと投影され、形状界のデータは現象界へと投影されるのである。

したがって、非形状界でデータとなっている光を作り出すことができるなら、宇宙の根本となっている非形状界のデータを変え、その投影先である形状界、現象界を全く別の状態にしてしまうことさえできるというわけなのである。そして、

自ら光を発している、つまり作り出しているものを象徴して、ここでは太陽と言っているのだ。

反射光のように実体のない宗教の後、太陽のように光を作り出して未来を変えてしまう宗教が登場する。そのため、ノストラダムスのこの予言が成就した暁には、その後の出来事として予言している事象は起こらなくなるということなのだ。このようなことが実現したならなんと素晴らしいことだろう。わたしたち人間はもはや運命には左右されなくなるのだ。

◉二〇三五年、キリスト教社会は崩壊する？

わたしが、この月で表わされている宗教がキリスト教であると考えていることは先程述べた。その理由は、これまでキリスト教を背景とした世界が長く続いてきたこと。『ヨハネの黙示録』ではキリスト教を獣の数字で表わし、キリスト教社会の崩壊を予言していたことなどからである。月に代わって太陽が登場すると

なると、キリスト教社会の崩壊を予感させるではないか。

わたし「ところで、この予言の成就の年代をどのように割り出したらいいと思うか？　わたしはね、この詩が第一章の四十八番となっているところから、四百八十年を表わしているのではないかと考えるんだ。つまり四百八十年後――。で、いつから四百八十年後かといったら、この予言詩集が出版された一五五五年から四百八十年後であると。そうすると西暦二〇三五年というのが出てくるね。これはキリストが死んでから二千年後ということになる。」

Y「キリストが死んでから二千年？」

わたし「そう。死んでから二千年だと。そしてわたしはこの二千年を、ノストラダムスは〝二十年間の月の統治〟と言い表わしたのだと思うんだね。つまり、これがキリスト教社会が続く期間だ。だいたい年代的にも一致するんじゃないか？　キリストが死んだのは西暦何年になっているか、マンジュシュリー？」

M「二六〜三〇年と書いてありますね。」
わたし「これに二千年を足すと、近いでしょう?」
M「はい。すごく近いですね。しかし、類推定年代ですから、他の資料も見てみますね。」
ヴァジラロカ（以下V・R）「こちらでは三五年ごろとなっていますね。キリストの処刑が。」
U「こっちは三三年。」
わたし「処刑が三三年、三五年。近いよね。もし、三五年キリスト処刑死説を採るなら、その二千年後として、さっきの二〇三五年という年にぴったり一致しているわけだ。この一致はすごいよね。」
M「しかし、どうしてキリストが亡くなってからなんですか?」
わたし「なぜかというと、亡くなってからキリスト教がスタートしたからなんだよ。つまり、キリストが実際に布教していたときというのは弟子も少なかったわ

けだし、本来発展する宗教じゃなかったんだよ。」

M「で、四十八を四百八十年とするのは？」

わたし「これもわたしの直観だね。」

M「直観？」

わたし「というのは、前回の、ええとあれは何だったっけ、ヴィマラ？」

V「あ、あれは一五五五足す四三一で一九八六年という――。」

わたし「ああ、四章三十一だったね。これにはわたしがオウム真理教とシャクティーパットを始めたことが予言されていたわけなんだけど、四章三十一を四百三十一年として一五五五にプラスしたら、ピッタリ年が一致したんだよ。それと同じように、ノストラダムスは数字のトリックをいろいろな詩で使っていると思うんだね。

ノストラダムスは、カバラの秘法を修めていたというから、当然カバラの〝数秘術〟は知っていたと思うよ。しかし、年代を表わすのに〝数秘術〟は使ってい

ないと思うね。なぜって、彼は後世の人間には予言詩を解読して何とかしてもらいたいと考えていたのだから、〝数秘術〟のようにそれを知っている者だけが解けるような操作は当然しないだろう。ただし、数字のトリックは使っている。もっとわかりやすいような数字のトリックをね。」

◉〝太陽の社会〟とは？

さて、二〇三五年前後に月の統治、つまりキリスト教社会が完全に終焉するということがわかった。次は二行目の、

〝太陽が月のうんざりした日々の責任を引き受けるとき〟

である。これはすぐわかると思う。自ら光を発する太陽が、単に光を反射するだけの月に代わって登場し、月が今までになしてきた精神的荒廃の責任を引き受けるとき、という意味である。そして、

〝わたしの予言は成就し、損なわれる〟

とこうなるわけだ。つまり、ノストラダムスの予言はそこで完全に終止符が打たれるということなのである。

そして、ノストラダムスは、この予言が成就して、それ以降自分の予言は役立たなくなるということを望んでいたに違いないのだ。このとき、具体的にはどのような〝太陽の〟社会が出現するのだろうか？

◉次々と翻訳される〝本物の予言詩〟

さて、以上のことからもわかるように、わたしは翻訳チームらの協力を得て慎重に訳していった。次からは注釈を付けるのみとして、いくつかの詩をご紹介しよう。

【五章五十三】

太陽の法と金星が争う

予言に合った（予言されていた）魂を支配者にする
二つのどちらも理解しない（お互いに理解できない）
偉大なメシアの法は太陽に由来する

（オウム真理教翻訳チーム訳）

この詩のポイントは〝太陽の法〟と金星という言葉だろう。

太陽は、先程の詩でもあったが、錬金術辞典によると、自ら光を発するものであり、〝一定して放射をする永久の炉であり、常に姿を変えず、よって金の光のように安定し、不変である〟ものである。つまり、絶対的なもの、真理なのだ。

それに対する金星とは、〝快楽の分配者であるこの女神ヴィーナスは、英雄的な行為をするというよりも、その悩ましげで官能的、柔らかな存在という見地によって肉体の中の魂を魅了します。彼女は人生の厳しさを巧みに避け、その魅力を享受し〟というタイプ。ノストラダムスが一言ですべてを表わしてしまってい

第5章53

La loy du Sol,& Venus contenoens,
Appropriant l'eſprit de prophetie:
Ne lun ne lautre ne ſeront entendens,
Par Sol tiendra la loy du grand Meſsie.

（1557年版）

太陽の法と金星が争う
予言に合った（予言されていた）魂を支配者にする
二つのどちらも理解しない（お互いに理解できない）
偉大なメシアの法は太陽に由来する

（オウム真理教翻訳チーム訳）

るところがすごい。

このことから太陽に属するものと金星に属するものが争うが、お互いに理解できないということを表わしていることがわかる。また、この〝争う〟という言葉であるが、これは現代ではこの単語は使われていない。十六世紀のフランス語である。

わたしはまだこの予言詩は成就していないものととらえた。

反対に次の詩は、訳し初めてすぐにノストラダムスの時代から近い未来の出来事であるということに気付いた。

◉近未来ほど具体的な表現に

【第一章十】

こうかつな人が鉄の牢獄の中に追いやられた

そこには王の七人の子供たちが捕らえられている
旧教徒と新教徒が修羅場から後に生じる
けれども、暴力的な歌声によって、確かに決別する。死と叫び
（オウム真理教翻訳チーム訳）

この詩は抽象的ではない。かなり具体的だ。ヴィジョンを見やすいため、予言は近い未来のものほど具体的になるものだ。すなわち、ノストラダムスの時代に近い未来予言だということである。

そこでわたしは、一五六二～九八年にかけて起こったユグノー戦争に目を付けた。果たしてこの予言詩と一致する出来事が起こっているかどうか。特に〝こうかつな人が鉄の牢獄の中に追いやられた〟という一行目に一致する史実があるかどうかで、この解読は決まる。

ユグノー戦争

〝……（略）……宗教革命はフランスでも一六世紀前半から広く起こり、カルバンの『キリスト教綱要』の出版（一五三六）後、新教徒はカルバン派を中心にカトリック（旧教徒）とはっきりたもとを分かち、激しさを増す弾圧にもかかわらず、強力な組織力をもって王国に深く浸透した。……（中略）……カトリーヌ・ド・メディシスは両派の均衡のうえにたって寛容政策を進めたが、両派の対立は激しくなるばかりで、ついに六二年ギーズ公一隊による新教徒殺害を契機に、以後九八年まで八次におよぶユグノー戦争が始まることとなった。……一五七二年両派の和解のために画策された新教徒の総帥アンリ・ド・ナバル（後のアンリ四世）と、王妹マルグリットとの結婚式は、旧教派による新教徒殺戮に利用され……〟

（『日本大百科全書』より）

旧教派による新教徒殺戮――このときの虐殺を『サン・バルテルミーの虐殺』と呼ぶ。この虐殺によって約八千人の新教徒が殺されている。

ノストラダムスもカトリックであるから旧教側である。アンリ四世を悪魔と呼んでもおかしくはない。問題はアンリ四世が捕えられたことがあるかどうかである。わたしのインスピレーションでは、この詩はこのころの宗教的闘争を予言したものであるはずだ。もし、わたしのインスピレーションが正しいとなると、この詩は詩の番号そのままの十年後の出来事の予言ということになる。

「あ、アンリ四世。これは軟禁されていますね。」

百科事典を調べていたマンジュシュリー正悟師が驚きの声を上げた。

「思ったとおり軟禁されているでしょう。読んでみて。」

「〝アンリ四世（一五五三～一六一〇）。フランス国王。ナバール国王。アントアーヌ・ド・ブルボンとジャンヌ・ダルブレの子として、一五五三年一二月一三

日ベアルンに生まれる。幼少のころからカルバン主義の教育を受け、第三次宗教戦争のとき、新教徒軍の総帥として登場。サン・ジェルマンの和議（一五七〇）によって旧教徒と新教徒との和解が成立し、七二年八月にアンリはフランス国王シャルル九世の妹マルグリットと結婚。その一週間後の八月二四日の夜から翌朝にかけてサン・バルテルミーの虐殺事件が勃発し、アンリも宮廷に軟禁、カトリックへの改宗を余儀なくされた〟」

「やはりねえ。」

「その後脱出して、新教に復帰となっていますね。あれ？　その後、また旧教に改宗してますよ。フランス国王アンリ四世となったときのことなんですが、読みますね。〝――しかし、サリカ法典が国王はカトリックであることと定めていたため、九三年サン・ドニ教会でカトリックにふたたび改宗し、翌年シャルトルで聖別式を受け、パリに入城した〟」

「こうかつな人だよ。こうかつだよ、この人。二回も敵方の旧教に改宗している

第1章10

Serpens tranſmis dens la caige de fer
Ou les enfans ſeptains du roy ſont pris:
Les vieux & peres ſortiront bas de l'enfer,
Ains mourir voir de ſon fruict mort & crys.

（1555年版）

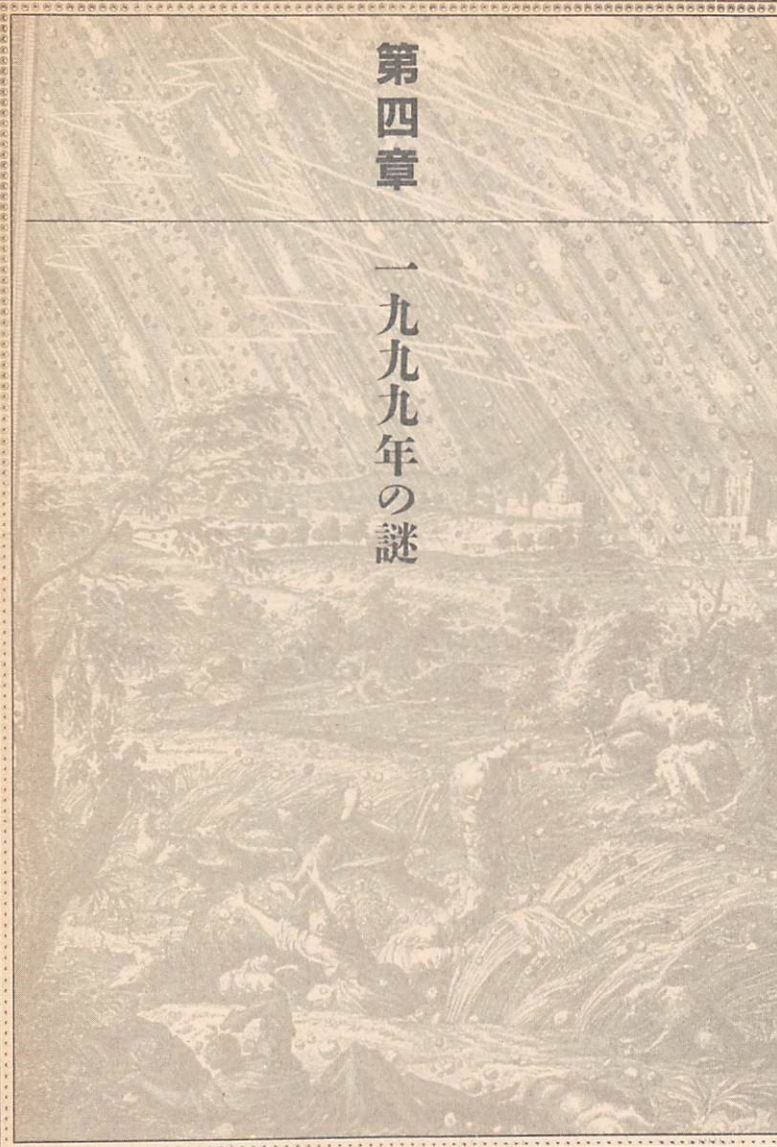
こうかつな人が鉄の牢獄の中に追いやられた
そこには王の七人の子供たちが捕らえられている
旧教徒と新教徒が修羅場から後に生じる
けれども、暴力的な歌声によって、確かに決別する。
死と叫び

（オウム真理教翻訳チーム訳）

んだもの、コロッと。」
「都合で変えていますね。」
「ね、第一行目は、やっぱりアンリ四世のことだよ。」
これがアンリ四世のことだとすると、二行目の〝そこには王の七人の子供たちが捕えられている〟というのももっともなこととなる。なぜなら、アンリはその後にフランス国王となってブルボン朝を創始しているからだ。そのブルボン朝の王がアンリを含めて七人。つまり、この軟禁事件にはブルボン朝の未来がかかっていたといえるのである。
そして、この宗教戦争は、『ナントの王令』によって信仰の自由が保証されて終っている。つまり、旧教徒も新教徒もここではっきりと承認されているということだ。この史実は、〝旧教徒と新教徒が修羅場から後に生じる〟に一致している。
なお、最終行の〝けれども、暴力的な歌声によって確かに決別する。死と叫び〟というのは、この悲惨な宗教戦争の有り様を描写していたのである。

第四章

一九九九年の謎



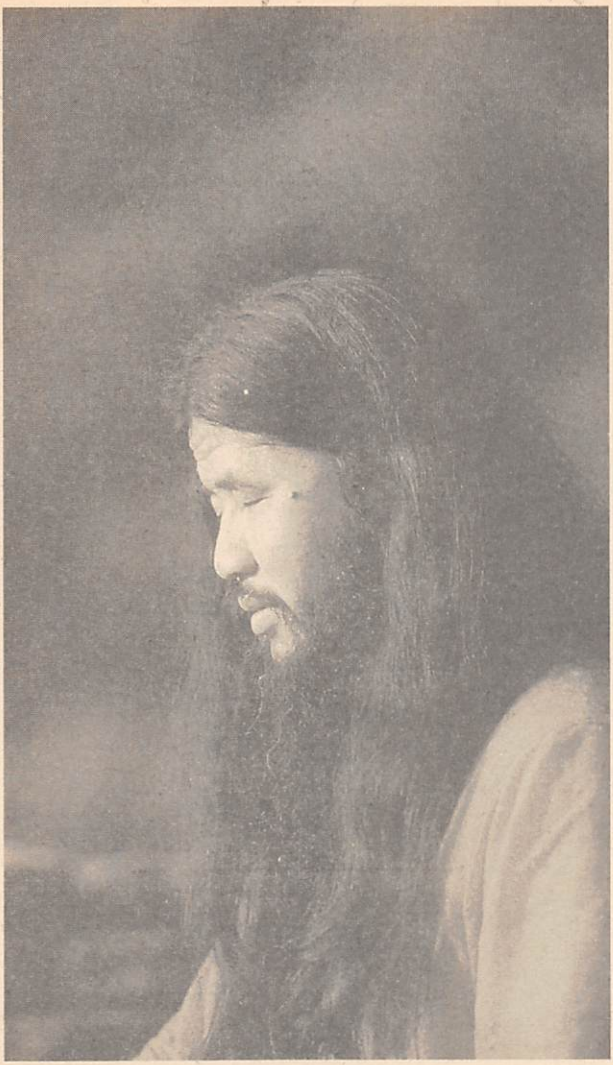
◉明かされる『一九九九年七の月――』の秘密

その後、わたしは今日に至るまでのブランクを経て、再び〝あの詩〟に注目せざるを得なくなった。

「ひょっとしたら、これまで日本で紹介されていた訳に問題があったのではないだろうか？　その訳から来る先入観から、あの詩がわたしの見ている未来ヴィジョンと合わず、それに対する疑問が生じたのかもしれない。これはわたしが訳し直す必要があるのではなかろうか？」

そうなのだ。わたしは翻訳と解釈の作業を進めていくうちに、ノストラダムスの意図をくみ取ることが非常に難しいことを実感したのだ。それは、先に挙げた予言詩解読の例でもおわかりになることと思う。

ノストラダムスは、例えば〝太陽〟あるいは〝金星〟といった一言に、錬金術で使われるすべてのイメージを含ませたり、その事件の性格をあまりにも象徴的な言葉で表現したりしているのである。



また、十六世紀のフランス語の単語が、現代フランス語ではなくなってしまっている例さえあるのだ。例えば五章五十三の詩で、わたしはフランス語から〝太陽の法と金星が争う〟とした。ところが、この〝争う〟という単語 contendens は、現代語にはないのである。

このようなことから、わたしはあの詩の解釈に疑問を持ち始めたのである。何の観念もないところから訳し直し、検討した方がよいのではないだろうか？ 確かにこれはノストラダムスの死後の版にあるものだが、学者の間でも、この詩自体が偽物か本物かということについては様々な意見があるというし、これまでの訳にとらわれて性急に偽物と断定するのは危険ではないか？

あの詩――、言うまでもなく、〝一九九九年七の月〟である。

ここでもう一度これまでの訳と原文をここに書こう。

【第十章七十二】
一九九九年七の月
恐怖をまき散らす大王が天から降りて来て
アングーモワの大王を甦らせるだろう
その前後に軍神が幸せに統治するだろう

L'an mil neuf cens nonante neuf fept mois,
Du ciel viendra un grand Roy d'effraieur:
Refufciter le grand Roy d'Angolmois,
Avant aprés Mars regner par bon-heur.

この原文はショマラ氏が「本物・偽物両方ある」と言った一五六八年版のものである。日本で紹介されているものは一六七二年版のものであるが、二つの文を

対比したところ、表記の違いのみしか見られなかったので、一応十六世紀のフランス語で書かれた方を訳すことにした。

◉『アングーモワの大王』は『神の御使いモーセ』

この詩の中でどうしても訳せないのが〝アングーモア〟とされる〝Angolmois〟である。こんな言葉は十六世紀のフランス語にも現代フランス語にもない。ゆえにこれまで〝grand Roy d'Angolmois〟をそのまま〝アングーモアの大王〟と訳し、それが一体何なのかという論議が戦わされ続けてきたのである。

わたしは、これはノストラダムス独特の造成語ではないかと考えて検討してみた。すると、なんと〝神の御使いモーセ〟という言葉が浮かび上がってきたのである。

つまり、神の御使い Ange（英語ではエンジェル）と、モーセの Moise を合わせ、その二つの単語を〝～出身の〟という意味の ol でつなげると Angolmois＝

神の御使いモーセとなるのだ。なお、フランス語の詩においては、単語の最後にある e の省略は一般的に行なわれていることなので、Moïse の e が省略されていることは何ら問題ではない。

となると、この三行目は〝神の御使いモーセが甦る〟となるのである。

このモーセがどういう人物であったか、聖書をもとにモーセの生涯をたどってみることにしよう。

◉〝モーセ〟という人物

モーセはエジプトで貧しいヘブル人を両親として生まれたが、当時はヘブル人が強大になることを恐れたパロによって、ヘブル人の男の子が生まれたらすぐに殺すよう布告されていた。

モーセを助けようとした母と姉は、彼を葦の茂みに隠す。それをパロの娘が見つけ養子とした。モーセは、実の親から離れたままエジプト人のあらゆる学問を

学び成長する。

だが、ある日、モーセはヘブル人労働者がエジプト人に打たれるのを目撃、そのエジプト人を殺してしまい、ミデアンの地に逃れた。そこで彼は、祭司リウエルの娘と結婚し、二児をもうける。

そして、四十年後、シナイ山で神ヤハウェに出会い、「イスラエル人をエジプトから救い出して〝乳と蜜の流れる〟カナンへ導け」と命じられた。

こうしてモーセはエジプトへ戻り、イスラエル人をエジプトから脱出させようとしたがパロに邪魔される。そのため、ヤハウェは十の災いを次々とエジプトに加え、その脱出を助ける。その後、イスラエル人は、シナイ山においてヤハウェと契約関係に入り、ヤハウェの民となったという。このときモーセはイスラエル人の守るべき〝十戒〟を授かっている。

四十年間にわたるカナンへの荒野への旅は困難を極めイスラエル人の不満がつのったが、モーセはその優れた指導力によって最後まで忍耐強く導いた。しかし、

自らはイスラエル人がヤハウェに対して持った不信の責任を負わされ、カナンの地を踏むことを許されず、カナンを眺めつつ死ぬ。

以上がモーセの生涯である。ここで特記すべきは、彼が単なる伝説上の英雄ではなく、実在人物であったということである。そして、その豊富な資料から、国民的指導者、予言者、宗教的指導者、祭司と、様々な素顔が明らかになっているのである。

おそらく、一九九九年には、このモーセのような人物が出現するのだ。また、このとき現われるモーセは、『ヨハネによる福音書』で『父のみもとから来る真理の御霊』としても予言されている。

◉ついに導き出された〝パドマサンバヴァ〟の名

そして、最終行。わたしには〝軍神が幸せに統治する〟などとは考えられなかっ

た。なぜならば軍神（マルス）は戦いの神であるとともに戦争を表わすからだ。そのため、この訳も最初から疑ってかかった。すると、〝幸せに〟という箇所 par bon-heur がそのまま〝ボン教の予言にしたがって〟と訳することができるということに気づいた。

ボン教というのは、仏教導入以前にチベットで信仰されていた宗教である。そして今日のボン教は、九世紀後半以後仏教に同化したもので、古派の教義の影響が濃いとされている。

出た！　そんな思いがした。チベット仏教古派！　これはパドマサンバヴァの創始したチベット仏教ニンマ派のことを指すのだ。そして、ショマラ氏に語ったようにわたしはパドマサンバヴァの予言も解読したいと以前から考えていたのだ。くしくも一致したこの不思議さ。いったい、このボン教の予言とはどういうものなのか？　ヨハネ、ノストラダムス、そしてパドマサンバヴァ、この三人の予言が合わさったとき、一九九九年が確定する！

いずれこの課題に取り組むことになるだろう。

◉『ヨハネの黙示録』とも『マタイによる福音書』の予言とも一致

ここにわたしの全訳をご紹介する。

一九九九年七の月
恐怖の大王が天からやってくる
神の御使いモーゼが甦る
未来の前に軍神がボン教の予言にしたがって統治する

この訳だと非常にすっきりする上に、『ヨハネの黙示録』の予言とも、『マタイによる福音書』による予言とも一致するのである。

まず、『ヨハネの黙示録』から見てみよう。

【第一五章】

またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見た。七人の御使が、最後の七つの災害を携えていた。これらの災害で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌って言った、

「全能者にして主なる神よ。
あなたのみわざは、
大いなる、また驚くべきものであります。
万民の王よ、
あなたの道は正しく、かつ真実であります。
主よ、あなたをおそれず、

第10章72

L'an mil-neuf cens nonante neuf ſept mois,
Du ciel viendra un grand Roy d'effraieur:
Refuſciter le grand Roy d'Angolmois,
Avant aprés Mars regner par bon-heur.

（1568年版）

1999年７の月
恐怖の大王が天からやってくる
神の御使いモーセが甦る
未来の前に軍神がボン教の予言にしたがって統治する

（オウム真理教翻訳チーム訳）

御名をほめたたえない者が、ありましょうか。
あなただけが聖なるかたであり、
あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。
あなたの正しいさばきが、
あらわれるに至ったからであります。」
（『聖書・日本聖書協会』より）

ここに〝神の僕モーセ〟としてモーセの名が登場するのである。この後、預言では、ハルマゲドンを含んだ最終的な大災害が地球規模で起こることになっている。このうちのハルマゲドンは次のように記されている。

第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。すると、いなずまと、もろもろの声

と、雷鳴とが起こり、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起こし、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害ゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。

（『聖書・日本聖書協会』より）

しかし、ここで裁きを受けるのは神の激しい怒りを買うような生き方をしてきた人間であり、神の意にかなう正しい生き方をした一部の人間は助かるのだ。

◉〝狭い門から入った者〟は救われる！

同じようなことが『マタイによる福音書』でも、イエスの言葉として予言されている。

「弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、『どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』。

そこでイエスは答えて言われた、『人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。また、戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならないが、まだ終りではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである。

そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。そしてこの御国の福音はすべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」

（『聖書・日本聖書協会』より）

〝これらは生みの苦しみの初めである〟〝最後まで耐え忍ぶ者は救われる〟など、一部の人間が救われ、新しい世界が始まるであろうことが暗示されているのである。

そして、救われる人間を次のように言い表わしている。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこから入って行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。……（中略）……わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」

（『聖書・日本聖書協会』より）

これは単に『主よ、主よ』と祈るキリスト教の否定であることに注意すべきである。

◉待ち受ける破局、そして……

ノストラダムスが〝神の御使いモーセが甦る〟といっているからには、間違いなく破局が待ち受けているのである。そして、それがどんな破局かは、ボン教の予言がカギを握っているのだ。

（追記）

既にご理解いただけたであろうように、破局といってもすべての人類が滅亡してしまうわけではない。ほとんどが恐怖と苦しみにさいなまれて死んでいく中で、ごく一部ではあるが生き残る人類が存在するのだ。これは『ヨハネの黙示録』にも記されているし、『マタイによる福音書』にも記されている。そして、このノストラダムスの予言詩集『諸世紀』にもそれが暗示されているのである。

わたし自身も、瞑想によって見た未来ヴィジョンからそれを確信している。が、間もなくやってこようとしている破局の一九九九年、手をこまねいてそれを見ていようとは思わない。

ノストラダムスが今世紀に至るまで『諸世紀』を伝えてくれたことに感謝するとともに、彼の予言が、それ以降無効となってしまうような世界を築いていく努力はすべきであると考えている。

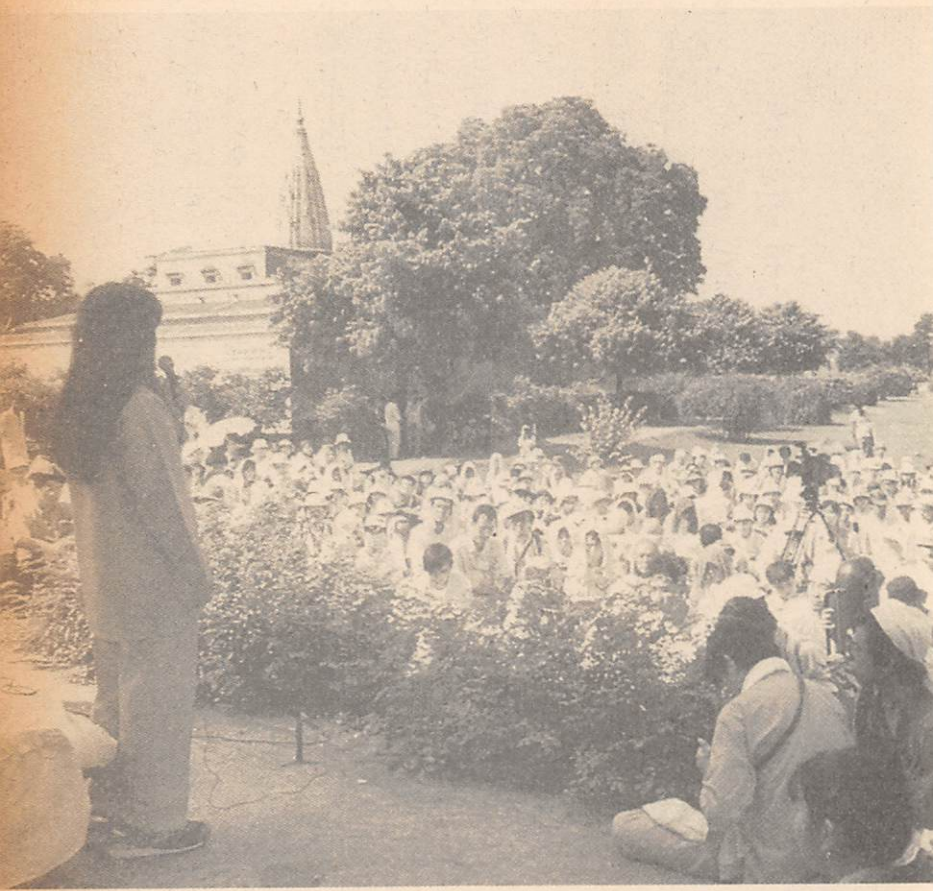
次の四編は秘密の詩である。これらによって一九九九年以降が予言されている。だが、これを今明かすわけにはいかない。その時期がまだやってきていないのだ。したがって、この秘密の詩について語るのは次回に譲りたいと思う。

なお、九一年十一月三十日に、京都市東部文化会館において行なわれる予定である『今世紀末の大破局セミナー』では、弟子たちにそのことについて語るつもりでいる。

今、その内容を知っても動揺しないという自信のある人で、オウム真理教の救済活動に参加していきたいという方はぜひ最寄りのオウム真理教本支部にまでご連絡いただきたい。

【第十章七十三】

Le temps prefent auecques le paſſé
Sera iugé par grand Iouialiſte



弟子たちに真理の法則を説く尊師。91年11月30日には、一体何が語られるのか？

Le monde tard luy fera laſſé,
Et deſloial par le clergé iuriſte.

【第十章七十四】
Au revolu du grand nombre ſeptieſme
Apparoiftra au temps Ieux d'Hacatombe,
Non eſloigné du grand eage millieſme,
Que les entres ſortiront de leur tombe.

【第十章七十五】
Tant attendu ne reuiendra iamais
Dedans l'Europe,en Aſie apparoiſtra
Vu de la ligue yſſu du grand Hermes,

Et fur tous roys des orientz croiſtra.

【第十章七十六】

Le grand ſenat diſcernera la pompe,
A l'vn qu'apres ſera vaincu chaſſé,
Ses adherans ſeront à ſon de trompe,
Biens publiez ennemys deſchaſſez.

読者諸氏が破局のうちにも救済され、新しい世界への切符を手に入れられんことを――。

麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1

幸福に至る四つの実践

B6判 定価2500円

仏教の基本ともいえる「四預流支」。多彩な側面から縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人にはもちろんのこと、幸福な人生を求めるすべての人に本当の生き方を指し示す。

PART-2

尊師、麻原彰晃が斬る!

B6判 定価980円

願望成就の秘訣、UFO&宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原彰晃尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手、鹿島とも子さんとの対談も加わって、ますます充実。

PART-8

仏教真理・六波羅蜜

B6判 予価550円

近日発刊予定

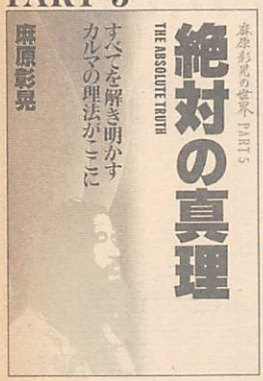
PART-3

真実！六道輪廻

B6判 定価980円

永遠の真実"六道輪廻"。すなわち、わたしたちはこのサムサーラ（苦界）をさまよい、苦しみ続けているのだ。果たして、ここから抜け出すことはできるのか？臨死体験・大霊界・チャネリングなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

PART-5

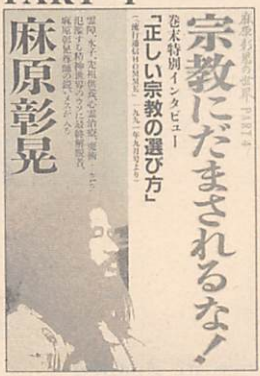


絶対の真理

B6判 定価980円

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる——幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

PART-4



宗教にだまされるな！

B6判 定価980円

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

PART-6

願望成就の秘法

B6判 定価980円

安全で確実な願望成就の秘法とは？仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

● 全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 本 社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著

真理勝者 絶対最勝の法則

第一誦品

大宇宙の実相

麻原彰晃尊師の修行体験と原始仏教などをベースに確立されたオウム真理教の教義をやさしく教える待望のオウム真理教入門書第一弾。

ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版 本 社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

最高の智慧、神をも超えた力……
最終解脱者があなたを変える！

オウム真理教

その修行ステージの高さゆえ、
〝イエシェ――完全なる絶対なる神の叡智〟
とチベット仏教の高僧より称えられる
麻原彰晃尊師。
最高の智慧と神通力を有した
日本でただ一人の最終解脱者です。
その麻原尊師が、
あなたに贈る幸福へのプログラム。
病から解放されたい……
最高の幸福を得たい……
解脱と悟りを得、神通力を
ほしいままにしたい……
こんなあなたの願いを、
麻原尊師が仏教・ヨーガ・密教の
あらゆる秘儀を駆使して、
速やかにそして確実にかなえます。

※資料請求券を貼付した八ガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

ノストラダムス
秘密の大予言
資料請求券

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『ノストラダムス秘密の大予言』読者係」までお送りください。

〒168　東京都杉並区宮前3-8-11
オウム出版「『ノストラダムス秘密の大予言』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市菅場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

ノストラダムス秘密の大予言

一九九一年十二月十四日　初版発行

定　価　六〇〇円
著　者　麻原彰晃
発行者　松本知子
　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二―一〇九三一五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© Shoko Asahara 1991
ISBN4 - 900497 - 95 - 9　C0010　P600E

ノストラダムス秘密の大予言

麻原彰晃

ISBN4-900497-95-9 C0010 P600E 定価600円(本体583円)